

---

# **サヨナラ …永遠の約束…**

グラキエース

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サヨナラ …永遠の約束…

### 【Zマーク】

N2650E

### 【作者名】

グラキエース

### 【あらすじ】

その眼で見届けよ…虚しい宿命と過去を背負う者達の結末を…。

前回投稿した『ただいま…友の涙…』の続編です。オールキャラネス▽ウイング（ミュウツー）中心

初めに…

この小説には作者の妄想文・設定、ややキャラ壊し、グロテスク・死ネタの表現が含まれています！（年齢制限としたら17以上は必要かもしません。）

上記の中で一つでも該当あつたら直ぐに「退場ください。

私の投稿小説を見て大丈夫平氣だよーといつ方はどうぞ。

なお、苦情は一切受け付けません。自己責任で閲覧をお願いいたします。

# sceneo - Introductory chapter -

私は

まひ

長くない

この体が

砂のよつ

舞い散るまでの

時間が

……迫つて

……来ている」と話を

ああ……せめて

せめい、

……」の体が

……消えてしまつたのなら、

私は……一つの

……行動を

……起りますまでだ。

例え……元の仲間達が

……牙を向いても。

そして…

我が<sup>ネス</sup>主を怒らせ 泣かせたとしても…

とても哀しくて…切ない物語がまた…

開幕…する。

## *Scene 1 Daily lives of people who find*

少し畠空のネタバレとMOTHERシリーズの技とスマブラファンから生まれたネタが少し含まれています。未プレイの方はご注意を。グロの部分は多分…ないと想つので「いやくすぐり閲覧ビッツモ」。

# Scene 1 Daily lives of people who find

何時もながらの彼らの戦い…

互いに競い合い・互いに混じり合うことでの

絆がより深く高められる。

そんな彼らの日常をその眼で刻め…。

…スマッシュワールド スマブラスタジアム ステージ終点…

ワアアアアアアアアアアアアア…！…！

ガキンッ！ギイイン！カキイイイン！…

アイク「フッ！ハア…！…てい…！」

ネス「ha！ya！…yeear…！」

いろんな世界から来た多くの観客が魅了と盛り上がる声援でヒートアップする中、中央に浮いているステージから観客席まで響き渡る金属の音…ネスの持つバットとアイクの持つラグネルが高速に打ち合つて火花が飛び散りながらも一人は舞うように戦っていた。

ネス「PK Flash…！」（PKフラッシュ…！）

ボオオン！！

頭に赤い帽子を青と黄色のボーダー服を靡かせ長いGジャンと赤いスポーツ靴を着た超能力青年「ネス」の両手から放たれた大きい緑色の光が、額に巻いている紺色の鉢巻と紺色の鎧を着て紺色のマントを靡かせる剛腕剣士「アイク」の身体に向けて放たれ爆発するが……

アイク「甘い！」

ババツ！

低空中緊急回避（絶に近い）でステージを滑りながらアイクは完全回避する。

ステージを滑りながら剣先に最大集中した炎をネスの足元に向けて突き刺す。

ドウンツ！

ネス「」

ネスは口笛を吹きながら軽くジャンプして避け、ネスの足の先端に集中したPSIをサッカー選手のように素早くアイクの腹に向けて蹴りを放った。（PKエアフロントキック）

ビュオッ！ガッ！！

アイク「ふんつ！」

ガシツ

アイクは瞬時に外椀受けでネスの蹴りを逸らし更にネスの足を掴んで、ネスは「oh! shit!!」と言いながら思い切りネスの身体をステージに叩きつけた。

ガツ

ネス「う…ぐつ… oh!..」

アイク「喰らえ！」

ボン！

アイクの持つ炎を宿す大剣…ラグナルが、倒れているネスにむけて一刀両断如く振り下ろが、ネスはソレを避けようとせず、右手に白い発光を出しながら前へと伸ばす。

カキンッ！

ネス「oh.. It shall not be a danger  
ous fellow.(おつと、危ないな。)」

ネスはスマブラメンバーでも破ることすら難しいPKシールドを使い、雪の結晶の形と似た壁が出来てアイクの斬撃を完全に防いだと見ている観客・控えていたる選手は思ったが…

ピシッ…

アイク「今日は…朝、肉をたっぷりと食つてきたからな。俺の力は、これまでに無いほど…最高潮なんだ！」

ミシッ…

ネス「Hann?」

シールドにビビが入り、ネスはやや呆れた表情のまま徐々にシールドにビビが広がっていくを見つめていた。

ネス「It strengthens so much by extending in which it eats bacon? It shall not be an amusing fellow.（ベーコンを食べた程度でこんなに強くなるの？…まつたく、可笑しい奴だな。）」

アイク「？…何を言つているのか分からぬ…どんなに不思議壁を張るうが…」

バキヤアアアア！

シールドが破壊されシールドの破片が時が遅くなつたかのように粉雪のようにネスの身体を逸れるようにふりそそぐ。そしてシールドの破片が舞う中アイクが持つラグネルの剣先が正確にゅっくりとネスの首の中心、咽喉仏に向けて突き刺していく。

アイク「俺の前では、役には立たん。」

ネス「Please do not approach me t

he remainder of the serious lo  
ok . (真顔のまま俺に近寄るなつて。(汗))」

アイクの持つラグネルの剣先がネスの咽喉仏にあと数ミリ突き刺さ  
る寸前：

ブウウン…ガシッ!!

電子音のような音が鳴り、ネスの体が一瞬の内に消えて違う場所に立っていた。どうやらネスは瞬時にPKテレポートを使って後方へと退避し、アイクの渾身の斬撃を逃れたらしい。その直後：

ボンッ!

爆発音が鳴りネスはもう一度自分が居た位置に視線を向けると、機械で出来た土台の一部が焼け解けて、墨になつたコードが散乱していた。

ネス「Your thermal power is too strong..(火力強すぎだろ...)」

アイク「いぐべ…」

ザンッ!

アイクは地を蹴つてラグネルの力強い横薙ぎの一撃がネスの腹部を正確に狙い斬りかかる。

ネス「Ha!」

タン！…ヒュオオツ！

ネスは襲い掛かる一撃を両足に力を込めて蹴り、全身に白い発光を包まれながら高速に上昇しスタジアムを見下ろす位置まで飛んだ。

ネス「If it is in the air, your attack is limit? What is this?  
(空中ならアンタの攻撃は制限あるだ…ん？…なんだ…コレ?)」

ブオン…ブオン…

目の前に剣ラグネルが回っている。何故空中に剣があるのかは次の行動で理解できるのを時間は掛からなかった。

アイク「大つつつつ！天つつ！…空う…！」

ネス「(マジか！?)」

ブオンッ！

目の前には地上にいるはずのアイクが…それに全身金色のオーラがかかっている…。瞳は黄金色に光らせ両手には剣を今でも振り下そう如く構えていた。

どうやらアイクは地上に出現したスマッシュボールを手にとつてすぐには発動させ、空中にいるネスに向けてラグネルを投げ付けて、超人的の跳躍力で空中回転しながらラグネルを手に取り、力任せでネスの頭部に目掛けて振り下ろした。

ネス「……つPK Shield！(ヤバイ！PKシールド

ー)」

カキイイイイイ…

ネスは両手を前に伸ばし破られたシールドよりも強い輝き・耐久力を持つ薄い虹色の円形シールドを全身に張つてアイクの最後の切り札をネス自身の強い精神力<sup>ココロノチカラ</sup>で防ぎきろうとするが…

キシイイ…

ネス「つ！？」

体が少し下へと下がっていく感覚を覚え

アイク「守りだけでは…どうにもならんぞ！それに…」

ネス「おー！」

ギシッ…

アイクは不適に微笑しながら更に力を込めてラグナルを握りなおし、ネスが張っているシールドを深く押し込む。ネスはアイクの表情を見てやや青ざめシールドの維持を保つように心の中で集中しながらアイクを見つめていた。

アイク「実際に一回、かつて俺達の敵だつたエインシャイント卿（本当はロボット）の頑丈な亜空爆弾を俺一人だけ断ち斬つたからな！」

ガシャアアアンッ！

アイクの最後の一撃がネスが張っていたPKシールドをぶち破り、ネスの身体にラグネルの炎が襲いかかる。

ネス「（つチイ！とんでもない奴だ！PKシールドを破るなんて！…）」

ネスは腕をクロスさせて腕の所々が火傷になりながらもある程度の被害を抑えたかにみえたが…

ブシッ！

ネス「があ！？」

突然アイクの攻撃範囲から逃れているハズのネスが、左肩から右脇腹まで斜め一直線にボーダー服ごと切り裂かれ赤い鮮血が出る。どうやらアイクの切り札の最後の一撃で発生した剣圧で、ネスの位置とかも関係なく切り裂いたようだ。

アイク「ネス、腹筋が足りないぞ。もっと俺のようになれば肉を食べべつや一つ付ければ」

ネス「（肉食えば直ぐに筋肉付くわけねーだろが（汗））」

アイクの言葉を聞いてネスは心の中で突っ込みながら、体は真下へと急降下されてしまい、観客達が「きやあああ！」「うわあああ！」と固いステージの土俵に近づく度に段々と大きく悲鳴をあげた。

ネス「You are a brute force etc.」  
馬鹿力め…」

グウン！

ネスの体が硬い機械の土台に叩きつけられる前、全身体に力を入れて手を広げながら「ハアツ！」と言つて空中で踏ん張る仕草を取つた。すると…

オオオ…

地面ストレスレの所でネスの体が止まりそれを見ていた観客達は「おー！」「わああー！」と安堵する。

アイク「ほあ…せええいいいやー！」

ギュルルルル！…！

アイクは少し口元を吊り上げた後体を回転させて剣を下に構えながら、真下にいるネスに向けて高速に急降下する。

ネス「Woooow!（おうとう）」

バガソツ！…

ネスはすぐさま低空飛行でアイクの追撃を回避した直後…

ドオオオオン！…

何かに引火したのか先ほどまでネスが居た位置に爆発が起きて黒い噴煙が溢れ出る。

ドッ…

ネス「o h... f... fuck...」

飛び散る機械の破片の一部が背中に当たりネスはやや呻きながら、まだ破損していない機械の土台に降り立つ。

ズキッ…

ネス「つ...く。（傷は幸い浅い…だけどめちゃくちゃ痛いな（泣））

「

アイクの剣圧で開いた傷口が痛み出し、ネスは少しよろけたもの不屈の精神力で立て直し傷口に右手で押えたまま、噴煙をキリっとした表情で見つめなおす。

アイク「流石…体が傷ついても気にせず屈することもないはずば抜けた精神力…マルスから聞いたが、お前は歴戦の戦士の中で随一…子供戦士達を束ねる男と言われているな…俺はそんな奴と戦つて楽しい気分だ。」

シユウウウ…

ネス「…Do you like f i g h t? （…戦いが好きなのかい？）The struggle mind seems to have gone out extraordinary... when your expression is seen...（アンタの顔を見ていると、とてつもねえ闘争心がわんさかと出ているようだな…。）」

黒い噴煙がステージを覆いつくしても、アイクはやや不適に微笑しながらラグナルの剣先を手前に立っているネスの体に向けて構える。

アイク「本気で来いネス。まだまだ戦いは始まつたばかりだ！」

シャキン…

刃の音が静かに鳴り、アイクが持つラグナルの刀身にネスの体が映る。ネスはため息を付きやや乱れた赤い帽子を被り直した後：

ネス「… Seriousness? … It really goo  
d? You may really put it out? (…  
本気? …いいの?本当に出してもいいんだね??)」

ニヤリ…アイクの挑発を聞いて、ネスは真顔から段々といたずらっぽい（腹黒い）表情へと変わっていく。

ネス「OK… Do not determine it. (OK  
… 覚悟するんだな。)」

ネスは両手・両足に集中したPSIを静かに光らせて、焼き切れたボーダー服を自然に発生する風で煽られながら、黒い笑みでアイクの元へと走つて行つた。

It Show time !!

…スマブラスタジアム 一階 選手受付ホール…

リュカ「あーあ、アイクさん…（汗）」

マルス「終わったね（笑）」

ザアアアアアア…

選手受付ホールにいた金髪超能力少年またはネスの弟子「リュカ」と神剣を携え異世界の一国の若き王子「マルス」がモニターに映るネスの不気味な表情を見て同時に言つた時、突然モニターの画面が乱れて、荒々しい雜音だけになつて映らなくなつた。

カービィ「僕らも早く行こ!」

トウーンリンク（通称トゥン）「ネス兄いの試合が終わっちゃう…！」

ピンクの球体の生き物「カービィ」と一頭身猫目ねぼ助縁の服を着た勇者「トウーンリンク（通称トゥン）」がはしゃぎながらホールを出て、観客席に走り去つていく。

リュカ「アイクさん…大丈夫かな？」

マルス「無理だろ。多分、もう死んでいるだろ?」（黒）

マルスの真っ黒コメントを聞いた時、リュカはやや身振るいしながら、ホールにいたマルスとリュカもカービィ達の後を追うように観客席へと向かつた。

…スマブラスタジアム 終点ステージ…

ネス「PK Hand stamp! PK Hand stamp!  
Needle kick! Head in the air  
ir bat! Kick in the air ”PSI”!  
! and! (PKハンドスタンプ! PKハンドスタンプ! ! !  
ドルギック! 空中ヘッドバッド! 空中PSIキック! ! !そしてえ…)

「

バチチ! バチチ! ドス! ドガツ! バチイツ!

アイク「ウゴツ! ボゴオ! ブバアア! ? ? ! ! (なんじゅこりやあ  
あ!? カウンターすら発動できなねえ! ? ? ! ハガツ! グハア! ! !)

「

ネスのPSIと独自に身に付けた激しい格闘技で、アイクの顔が酷  
いぐらいに晴れ上がりていき、体がPSIの影響なのだろうか、段  
々と黒くなつていく。

ネス「SUMAAAAASH!」

バキッ!

ネスは更にPSIが宿つた会心の回し蹴りでアイクを上へと蹴り上  
げた後…腹黒い笑みで両手に雪の結晶の形がした青白い光を生成し

た後、アイクに向け放つた。

ネス「PK Freez !!! (PKフリーーズ !!!)」

パツキイイイン。

あつという間にアイクの体が凍りついで、凍結になつたアイクが高速に空中へと舞う。ネスは追撃を試みようと足を数歩動かした時…

カラソッ…

ネス「oh!…」

足元に乾いた音が鳴つて音がした方向に顔を向けると、乱闘用アイテム…ホームランバットが転がっていて、ネスはすぐにホームランバットを拾つて両手に構える。

ひゅるるるるつ

アイクがステージに落ちてくるタイミングを図つて、思いつき里斯イングした。

ネス「Home run of victory! (勝利のホームラン!)」

カキーンッ！

凍結したアイクにバットの先端にクリーンヒットし、良い音を立てながら場外へと吹き飛んでいった。

カンツ！……

観客席に張つてあつたバリアの音が響き凍結したアイクを弾いて、  
クルクルと回りながらステージ階下にあるマツトへ：

ドオオオオオン！

擊墜の音を出しながら落ちていった。

アナウンス『 game set ! Winner of Ness  
! ! !』

ワアアアアアアア ! ! ! !

放送席から出る試合終了の掛け声で観客全体が、歓喜と怒号で大きく  
く搖るがした。

ネス「The End!.. It was IKE , and a  
quite happy game ! (おしまい！アイク、なかな  
かいい試合だつたぜー！)」

ネスはそつと呟いて目を閉じゆつくりと目を開けた後、蒼い淨眼から元の黒い瞳に戻つて頭部に被つていた帽子を取つて、周りの観客全員にアピールをした。（下アピール）

ネス「Han!俺の勝ち…だね！」

ウオオオオオオー！ ! ! !

自慢のPSIのパフォーマンスを観客に見せた後観客席の傍にある

小さい選手控え室に入つてイスに座つて傷口の部分に右手を当てて静かに呟いた。

ネス「Life up（ライフアップ）」

キィイイイン…

右手に集中した緑色の光がなぞる様に動かす度に、傷つけられた体の部分と火傷も消えていった。

ネス「あーあ折角ピーチが買ってきてくれたこの服を台無しにしてしまったよ…。後で説教を受けるなこりや…」

観客が更に盛り上がる最中、選手控え室入り口からカービィとトゥンが駆け寄ってきた。

カービィ「ネステイー！」

トゥン「ネス兄いー！」

ネス「ん？カービィに…トゥン？？」

更に遅れて控え室入り口からリュカとマルスが駆け寄ってきた。

リュカ「先輩凄いです！僕の技が使えるなんて…」

マルス「派手に戦つたねえ…まあそれでも、まさに撲殺天使だつたよ。流石は…僕が憧れているかわい「腐れ王子だけじゃねあんだよ！カスが！！（怒）」「

バババババ！――

カービィの怒りを込めたバルカンジャブがマルスに向けて放たれたが  
マルス「こらこらピンクボール君。僕達の試合が始まつていいのに  
に攻撃しちゃあ駄目じやないかアハハハ」

ヒュヒュヒュヒュヒュ！

マルスはニコニコ笑顔のままで分身の術でもやつたかのように難なく回避する。なぜこんなに早いのかは次のマルスの行動に移る際に分かるよつになつた。

ピョイン！

カービィ「げつ…（汗）」

マルス「手際良いだろ？どんな状況にさえスグに対応・行動できるように準備しなくちゃいけないからね。」

いつの間にか使つていたのか…マルスの頭部に乱闘用の『ウサギ頭巾』が付いていて更に左手に『リップステッキ』を持ちながらカービィの頭部に向けて花杖を振るつ。

マルス「少しば…落・ち・着・き・た・ま・え・」

パコンッ

カービィ「うみゅー！」

カービィは頭部に大きな花を植えつけられながら、試合ステージへと吹き飛ぶ。マルスはステージへと吹き飛んだカービイを見た後、危ない空気を読んでいないネスに向かつて寄りかかる。

ネス「いつのまに…。」

マルス「日常でも何が起こるか分からぬからね。ネス君も何かしら準備したほうがいいじゃないかな？」

ササツ！

どこから取り出したのかわからぬが、マルスはしかつりと置んだ蒼いジャケットを出して、焼け切れたボロボロのボーダー服を脱がし新品のジャケットに着せ変えた。

もちろん、うわさ頭巾とリップステッキを装備したままである。

リュカ「うつわ…キツモ…こんなにキモい王子なんて…始めて見まし…」

その光景を見ていたリュカが、さぶいほを出しつつ思わず本音を言いかげた時…

マルス「何か言つたかい？金髪腹黒泣き虫少年君？？」

スルツ…

リュカがの続きを遮るかのように、いつの間にかリュカの背後に回ったマルスが何時抜いたのか…神剣『ファルシオン』の刀身がリュカの首元に押さえられていた。

マルス「今この場で首をちぎん切るつもりだったんだけど」

バシュツ：

いつのまにかマルスの首元に白い光が宿つた木の棒が抑えられており、マルスは苦笑いしながら武器を押さえつけられているリュカに黒い笑みを送った。

マルス「腕を上げたね…金髪腹黒泣き虫少年君」

リュカ「先輩と毎・日鍛えていますから…」Jのぐらい出来ないといけません…でしょ、腹黒鬼畜策士サティスト王子…マルスさん?…Speech and behavior that it and a little while ago is extra…From it… Aren't you foolish?…(それと、さつきの言動は余計です。…それよりも…アンタ馬鹿じやねえの?)」

フフンとこう表情を出すリュカに対して、マルスは黒いオーラが出してつつ笑顔のままリュカに向けてこう叫んだ。

マルス「?…何を言っているのかな、金髪腹黒泣き虫少年君?…突然僕の知らない異国語を使わないでくれたまえ。(黒笑)」

リュカ「…Moreover, use. It isafe blow who doesn't like it by coming to wanting kill really!…また使いやがったな。本当に殺したくなるほど氣にいらねえヤロウだぜ!」(ド黒)

「ハハハハハハ…

二人は微笑み背中合わせながらでもドス黒いオーラが出ていて、更に漫画のような結界でも張られたかのようにマルスとリュカがいる場所に一般人・並の選手でも入れないぐらいにとてつもなく寒い・寄れない・恐怖のブリザード現象が起きていた。

ネス「あ…あの…マルス…リュカ…（汗）」

マルス「何だいネス君？（笑顔）」

リュカ「〇へ…びづしました先輩？？（笑顔）」

ペペペペペ…

突如危ない雰囲気を感じて戸惑う表情を出すネスが破つた時、一人はあのドス黒い表情から乱闘が無い日常の表情へと瞬時に代わって、先ほどのブリザード現象からお花畠と黄色い雛が溢れる二コ二コ全快の世界へと変わっていた。

ネス「し…」

マルス・リュカ「「し？」」

ネスがステージ側に指先を向けると…

ネス「試合に参加していないから…アンタら強制的に最下位だよ（汗）」

ワアアアアアアー！！！！

既に第一試合が始まつていて、新しいステージに居るカービィとトゥンが乱闘していた。つまり、制限時間内にステージに入つていなかつたためマルスとリュカは強制退場になり、最下位の実績を負うことになつたのだ。

マルス・リュカ「…しまつたああああああああああああああ！！！」

二人はムンクの叫びのように表情が蒼白になつて、お互いの背中にカービィの10tストーンでも乗せられたかのようにしてつもなく落ち込んだ。（○△□○の状態）

ネス「（まつたく…）」

ネスはややため息付いた後、片手に頭を抑えるかのようなポーズで今だに落ち込んでいる一人を見つめていた。

to be continues . . .

使えない技を何で使っているんだよ！

ここに「コモリ」一切しないでください。

次回から少しザンシニアス・ダークに向かっていきます。

## Scene 2 Past afternoon (前書き)

オリジナル人物が出てきます。ややホラーな要素・キャラ壊しが含まれているので閲覧にご注意ください。

## Scene 2 Past afterimage

誰もが心の奥に閉っている過去の產物から

唐突に掘り起こされる…

惨劇の映像デジヤブ

その映像は決して消えることはできないのだ…。

ピーンポーンパンポーンー

アナウンス『本日の乱闘は終了いたしました。最後まで観戦してくれたお客様！ありがとうございました！！またの機会をお待ちしております！』

夕方になると乱闘は終了し、アナウンスが鳴り響く。見に来ていた観客達はスタジアムから出てすま村の入り口にあるトリップゲート（要はワープ装置）を使い様々な世界へと帰っていく。

そんな中一つの世界である団体がマスターの予約で設備が新しい広い部屋…交流ホールにて待機しており誰かを待っていた。

…夕方 スマブラスタジアム 一階 選手交流ホール…

? 「お待たせしました英の国の諸君！それでは選手と交流をまつたりと楽しんでくれよ！..！」

団体の皆様「ハアアイ！！」

バタンッ！

宙に浮く白い手袋…スマブラオーナー『マスター・ハンド』がテンション高く言つた時、入り口の扉から二コニコ笑顔が出でいるマリオ達が入つてくる。

子供E「本物だ…マリオだ！ルイージだあー！…すげえええ…！」

大人A「俺…ヨッシーの背中に乗つてみたかったんだ！」

子供S「本物だあーゼルダだあーリンクだあーサインしないと…！」

大人B「か…かか…カービィに触りたいわ…！」

マスター・ハンド（通称マスター）「さあどうぞ！いい思い出を作るんだぞ子供達！…！」

子供全員「はあああああい…！」

興奮が飛び交う中交流会が始まつて、色々な人たちがマリオ達にふれあい・遊んだり・演技をする。そんな中…

マリオ「おーおー、ネスの奴…子供に人気あるな。」

ルイージ「うわー羨ましいなー。まあ、ネスはスマブラ子供軍団の  
頭だしね。（笑）」

ピーチ「んー。私達も負けられないじゃない？」

マリオ「えへへー！ そうだね姫！」

ルイージ「おっしゃー！ 頑張るかあー！」

マリオとルイージとピーチが交互に群がつている場所へ言つた時、特に団体の子供達の中で人気だったのは『ネス』だった。

先ほどの試合でカッコイイ！・超能力を目の前で見たい！サインしたいという単純な理由で群がつていた。

ネス「はい！ どうぞ！」

子供A「ありがとうお兄ちゃんー！」

子供B「僕も僕もー！」

ネス「慌てない 慌てない ちょっと待つてね坊や。」

子供B「はーい！」

ネス達は乱闘を見に来た複数の親子連れ子供達・一部大人達に拍手が飛び交う中…

ファルコン「さあ見るんだ…俺の素晴らしいピ・ン・ク色の筋肉を

「…」

ムチーン…。

自慢の筋肉を見せるためにポージングを取つたのだが、逆に子供達が顔を青ざめながら逃げ腰の状態で一歩一歩と下がっていく。

子供達一同、「気持ち悪い…」（逃げ腰）

ファルコン「ウソウソ…（汗）嘘だつてば…」れを見てくれ  
o w m e y o u r m o v e s ! !

オリマー「おいおいおおおいファルコン君（汗）逆に子どもたちが、怖がつているじゃないか…（呆）つーか逃げているし…」

一方西際では茶色い毛を全身に生やした大きい猿が子供を背中に乗せつつ、部屋を走り回りある程度満足させた後次に乗る子供・大人が群がつている場へと戻ってきた。

スタンツ！

ドンキー・コング（通称ドンキー）「ウホッ！ホッホッホ？？（ああ！次は誰が乗るんだい？？）」

ディディ・コング（通称ディディ）「次は誰が乗るの？って言つていい るよー」

子供G「じゃあ僕！」

ドンキー「ウッホッホー！！（OK！じゃあ、俺の背中に乗りな！）

「

各自のサインを書いて・ファルコンはオリマーに呆れながらポージングから自慢の技を…ドンキーは相棒であるティーティに通訳を任せ、複数の子供達を背中に乗せて交流室を故郷のジャングルのように動き回っていた。そんな中…

子供「お兄ちゃん！コレを曲げてみてえ」

ネス「おっ？ いよ！」

ネスはある程度サインを書いた後、今度可愛らしい女の子の一人がネスの前にスプーンを突きつけて『超能力を目の前で見たい！』と要求してきたので、ネスは女の子の髪を撫でながらスプーンを手に取り、少しながらの力をスプーンに送り込んだ。

ネス「よく見るんだよ。ホラつ！」

グニヤリツ

ネスが少しスプーンを前へと押した時、スプーンが柔らかくなつたように曲がつて、見ていた子供・大人達が大歓声を出した。

子供「すーーーーーー（興奮）お兄ちゃんもつとやつて！ やつて！」

ネス「あははーじゃあ、三一三一の技でも見るかい？」

子供全員「見るーーーー！」

ネスはズボンのポケットの中についたヨー・ヨーを取り出して、大人でも真似が出来ない大技を複数子供・大人達に見せたのだった。

リュカ「…先輩人気ありますね」

リュカが一人の男の子にサインを書け終えた時、ネスは大技を披露しながらリュカに言った。

ネス「リュカ…お前も何か出してみる。次はシャトルループ」  
キヤアアアア！ネスのヨー・ヨー技で子供達は大興奮し、更にヒートアップする。

リュカ「うーん、だつたらコレかな？PK Freez」

パキーンッ…パキキキキ。

軽い氷魂を空中に作り出して、超能力で少し形を修正した後、向日葵の形をした氷像を生成し、超能力でゆっくりと浮遊させながら床へと置いた。

子供D「す…すごーい！」

大人D「…細かいなあ（汗）」

子供C「試合に居なかつたのに〜」

子供H「最下位だつたじやん。」

リュカ「…めんね。（汗）」

ネス「ふつ！」

リュカ「あつ！先輩今吹いたでしょ！！（怒）」

一人一人の子供のブーイングの声を聞いたりュカが軽く謝罪した後、ネスの笑い声に聞こえやや憤怒する。そして近くにいたマルスがこそつと呟いた。

マルス「ふふふ…これも僕の作戦の内だよ、金髪腹黒泣き虫少年君

」

ススス…

抜群のタイミングでマルスが現れてリュカに近づく。そして二人は背中合わせの状態になり、マルスとリュカはそのままの状態で他の子供達・大人達に要求を応えながら小声で悪口全開の小言戦争が行われる。

リュカ「聞・こ・え・て・い・ま・す・よ？…腹黒鬼畜策士サディストS王子…つーか子供・大人達がいる前でいつちゃダメでしょ？それに作戦なんて始めからあつたんですか？？（黒）」

マルス「ふふふ…一言多い・それに五月蠅いよ、金髪腹黒泣き虫少年君 今更考えては人・間としてはお終いだよ（黒笑）」

リュカ「普・通…氣になるだろ。（ツツツツ）つーか今頃思いついた物でしょ？（黒笑）」

マルス「アツハツハ 真面目すぎるのは良くないねえ。人生楽しく

無くなるよ泣き虫少年君？？（ド黒）

リュカ「Hあ…」一生言つてゐやクサレ王子。（ド黒）

マルス「それはこっちの台詞だよ、腹黒泣き虫少年君（ド黒）」

ネス「（仲が悪いのか良いのかいつたいどうちなんだら…）（汗）」

「

子供・大人達の要求に応えながら真っ黒コメントを小声で吐き出す  
二人を除いてマリオ達は、長くて短い時間の交流を深めていった。

…数時間後 一階 廊下…

ネス「ふう…疲れたなあ…」

休憩時間が入りネスは交流室から出て、壁際に設置されてある自動販売機に寄りファ タを購入しようとした時…

ガコン…

ネス「？」

?「はい！お兄ちゃん」

購入ボタンを押し取り出し口に視線を向けた時、膝までの身体を持つツインテールの女の子が、ニコニコ笑顔でファ タを両手でネス

に差し出してきた。

ネス「や... 頼は...」

ネスは少し思い出し、先ほどのスプーンを差し出した女の子の「」と  
を「」

子供の「休憩時間に、あたし...お兄ちゃんの後を付けてきちゃって  
えへつ」

ネスはやや驚いた表情を出した後、女の子からファ タを受け取る。  
ネス「とらあえず、ありがとな。」で立っているわけにもいかないし...」

ネスはどこか座れる場所がないか辺りを見回す。左側にちょうど椅子  
と円型のテーブルが多く設置されているホール（休憩所）があつた。

ネス「ちゅうどあそ」に座る所があるから、其処に座りつ...それと、「」

ガコンッ...ヒュンッ...

ネスは自動販売機に向けて指先に光を放った時、購入した飲み物と  
同じように取り出し口から出てきて、その飲み物が白い発光で包ま  
れながら女の子の手元へと飛んできた。

ネス「はい、これさつきのお返しね。（笑顔）」

女の子は両手で収めるように飲み物を受け取った時、女の子は更に喜んだ。

子供C 「ありがとーーお兄ちゃんーー！」

ネス「あはは。 (コレだけのお返しなのに…こんなに喜んでもらつて俺は嬉しい気がするな。)」

ネスは心中でそう呟き、椅子に腰掛けてファ タを飲み始める。そして沈黙を破るかのように女の子が飲み物を少し飲み込んだ後、少し羨ましそうに呟いた。

子供C 「お兄ちゃんはいいよね…不思議な力があつて……」

ネス「え？」

ネスは飲む動作を止めて、女の子を見つめる。

子供C 「だつて…物を動かしたり、空を飛んだり、不思議な現象とかも出来て…あたちにもお兄ちゃんのような強い人になりたいんだもん…」

ネス「どうして?」

ネスは女の子に聞いてみる。

子供C 「あたち…学校でいじ…められていて…それで…それで…」

ネス「つー」

女の子が喋るたびに嗚咽が出始め、だんだんと蒼い瞳から涙が溜め込んでいく。

バチッ…

ネスの脳裏に少し電流が走る。

子供の「いじめに対抗する力が

…い ん！ …！…

…じん！ ん！…！…

…無いんだもん！

遂には泣き出してしまい、ネスは少し脳内にかすかな声と白黒の映像と雑音を見て、聞いて少し瞳を閉じる。

子供の「うう…あいつらが…悪いんだ…」

ジジジ…

…よ…な！

…お…がい…ほ…！…

ジジッ！

…ねよ…ま…！…

あたひは……なにも……悪くは……」

スウ…

女の子が泣きじゃぐっていた時、頬に暖かい感覚を受ける。女の子は少し違和感を感じて顔を上げると…

ネス「泣かないで…」

パサツ…

ネスの顔が間近にいて更に自分の髪を撫でられている。どうやらネスは自分の胸に女の子を引き寄せて宥めているようだった。

子供の「お兄い…ちやん?..」

ネス「他人に憎しみを持つちゃ駄目だ。…それと何よりも…」

ネスは女の子の頬に流れ落ちる涙を手で軽く拭き取った後、ぎゅっと抱きしめるように女の子に囁いた。

ネス「どんなに苦難をその身に受けよつとも、

バチッ！

い……？

…つぶ。…には…い…が…あるから。

ジ…ジジッ

……じ…… わ……

それを耐える心の強さが必要なんだ……

子供「うううううう？」

女の子が少し涙ぐみながら真顔のネスに向けて見上げる。

ネス「いじめなんて……直ぐに終わるわ。そんなに長くは続かないし、

……じ…… んな…… 一

……くは、……に使つてい……んじやない！

バチツー・ジジジジジジ！ガツ……ガガ……

……い…… が……せい……

……もつ…… 一…… が…… んじやう……

ある程度の月日が流れれば君は別の場所へと行くんでしょう？<sup>がつじゅう</sup>」

子供「うううん、そうだけど……

ネスの脳裏にまた映像が映つて、やや言葉が途切れながら聞こえてくる……。

ネス「そこでもう一度新しい友達を作つてさ……それで自分自身も変

わつて…

…人…い…き…ば…。

ガガガ…

ガガガガ…

…ルナ！…オロカナ…エドモ…！

ガガガガガガガ！

…来るな！……………………

新しい道へ歩めばいい…自分だけの道だからさ別に他人から言われるほど筋合はないってね！」

子供C「にい…ちゃん…」

ニカツとネスは脳裏に映ったモノクロの映像を無視し女の子に向けて笑うと、女の子も先ほどの泣きじゃくる仕草から笑顔が戻ったよう光の笑顔へとなる。

子供C「えへ…へ、まるで魔法でも…本当にかけられたみたい。」

だが、脳裏に映る映像は悲惨な状況となつて乱れながらでも映し出される。

ネス「俺も…君と同じような

……やめて……こ……い……で。

……キエロ……コノ……カイ……モロ……モ……

ガガガ

ガガガガガガガガガガガガ

ガガガガガガガガガガガガ

ガガガガガガガガガガガガ！

……私が……すべ……て……私の……から……

ガガガガガガガガツ！！

……やだ！……から離れないで！！嫌だ……

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌  
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌  
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌  
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌  
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

ガガガガガガガガガガガガガガガガ

嫌だあああああああアアアアアアアアアアアアアア

経験してきたからさ……何となくわかるよ。」

バシュンッ！

映像がそこで途切れ、ネスは女の子をある程度宥めた後頭にかぶせ

てある帽子を少し被り直し、テーブルの上に置いてあつたファ タ  
を手に取る。

子供「 プライ…」

ネス「?」

女の子の言葉を聞いてネスは、「？」が頭の上に付くように少し呆  
ける。

プライ「（それが、あたちの名前。その名前のせいであたちは…）」

ネス「名前だけで本氣で文句をつける奴なんかいないよ。」

プライ「え？？」

ネスは飲みかけたファ タを飲みながら、窓に映る夕焼けの空を見  
ながら言つ。

プライ「どうして…」

女の子はやや驚きながら窓際に移動したネスを見る。

ネス「俺は人の心を読めるんでね。『テレパシー』つて奴だが…そ  
れは置いといて、名前は深い意味があつて付けた物なんだ…これは  
一生の自分だけの宝物なんだよ。」

プライ「宝物…」

ネス「P r a y…祈りって意味なんだな。いい名前じゃないか…」

プライ「祈り…」

ネス「大切にするんだよ… もしまた何かあつたら君の両親や俺でもいいから相談して… できる限り俺は君… いや君達に助け舟を差し出すから。」

プライ「うん！」

プライは取り戻した笑顔でネスに向かって微笑んだ時、窓際にいたネスも彼女に答えるように同じ笑顔で返した。

……

ネス「さあ… 一緒に戻ろつか。 そろそろ休憩時間が終わるだろ？」  
…

カラソツ！

ネスは空になつた一缶のファ タを「ゴミ」箱へと投げ捨てた後、プライに向けて手を差し出す。

プライ「うん…！」

プライはネスの手を掴んで、交流室へと歩みだす。すると…

ザザザ…

ネス「（またか…。）」

ネスの脳裏に雜音が流れる音を出したつゝ、幼い頃の記憶が映像として現れた。

：過去の映像 夕暮れ ビニカの道端：

ネス「トレーシー、手を離すなよ。」

トレーシー「分かっているよ…家に着くまでお兄ちゃんのお手手は、一生離さないから！」

黒髪の少年「ネス」は、母親譲りの短い金髪を垂らすピンクのワンピースを来たネスの妹「トレーシー」の手を取って帰るべき場所へと歩き出す。

トレーシー「お兄ちゃん…足大丈夫？」

ネス「ん？…これか？？」

ネスはトレーシーが言つた足の部分を見ると、シミのような物が段々と紅く滲み出すように広がっていく。幼いネスは少し見た後、半分泣きそうになつていてる妹に少し笑いながら言つた。

ネス「このぐらいい平氣だよ。ただか転んだだけで…」

トレーシー「お兄ちゃん…本当のこと言わなくていいの?」

オオオオ…

突然トレーシーが心配丸出しの表情となつて、噴き出す風にトレーシーの金髪が横へ煽られながら兄である幼いネスに顔を向ける…

ネス「トレーシー…ママには絶対に本当のことを言つなよ。…またママが

ザザザザ  
ザザザザ ザザザ  
ザザ

…！ …ん…！…

ザザザザ

ザザザザ

ザザザザ…

雑音と映像が乱れながら赤い光らしき物が複数回り、その光の中心に立つ何か声を荒げながら叫ぶ複数の大人の物体が映る。

じ… む… も… ら…

…。僕たちはこの…を受け入れるんだ…。

ザザザツ！

あの出来事で取り乱す姿を見たくないから…な？」

一瞬だけ脳裏に映った出来事をネスは少し額から汗を流し体を震わせながら、自分の中にある勇気を頼りに心配の表情を出す妹に、少しづながらの勇氣を付けるように言ひた。

トレーラー「う…うと…わかつたよ……」

ネス「よしよし、今日の夕飯はハンバーグかなー？それとも…」

トレーラーは兄に言われるままに少し頷いて、顔を前へと向けなおす。ネスも前へと向いて皿をへと歩き出した。

あの口を振り返らなによいこと…

…

ネス「（俺がまだガキだった時に、妹と一緒に手を繋ぎながら歩いて帰った記憶と…思い出したくなっていることも…）」「トレーラー

プライ「…どうしたのお兄ちゃん…？」

ネス「あ…いや、なんでもないよ。」

ネスはやや力アツと顔を赤く染めながらプライに見えないように逆の位置で背ける。プライはやや「？」が頭の上に付けながら不思議

そうにネスを見ていたのであった。

(おこおこおこ...) ジェラルトはまたホームシ...いや...なんでもないさ  
.....もうあの出来事は...)

終わったんだ...いや、

終わったはずなんだ...。

ネスはプライの手を握り締めて、元の交流室へと戻つていいくのだった。

to be continues . . .

## Scene 2 Past afterimage (後書き)

次回からダーク・グロ要素が出てきます。更新は現実上…仕事が楽になつたら更新する予定です。遅くなるかもしませんが、どうか暖かい目で次回作をお待ちください。

*Scenes solved seal . Still , the crime*

漸く忙しい合間に潜つて更新完了(汗)。

グロテスク・ダーク・出血の表現が含まれています!! 閲覧ご注意ください。

### Scenes solved seal · Still, the crime

解かれていく過去の封印の映像

青年は何度も否定しても…

決して逃れることすらできない。「大罪」

今の世界で生きる青年の目には、

何を思い…

何を感じ…

何をその眼で、映しているのか…。

：夜 スマブラ寮 三階 306号室 ネスの部屋：

ビィー！ビィー！ビィー！…

ネス「！？つ何だ！？」

バウッ！

ネスはグッスリと暖かい布団に身を包んで眠っていた時、騒がしい

警告笛に飛び起きて田を覚ます。

ネスはすぐさまパジャマを脱ぎ、タンスの下にあつた赤い帽子と蒼いジャケットと黒いTシャツと長いズボンを身に包んで、脱皮如く田室を飛び出してある場所へと向かう。

ネス「（襲撃か！？それとも…）」

ネスだけでなくマリオやリンク達も（一部私服）来て全員が一階の作戦会議室へと走る。

ガノンドロフ（通称ガノン）「折角夢の中で、有楽街のネーチャン達と合コンアンド・デートをする夢を見たのにいー。」

ファルコン「俺も俺も！アンタと同じ夢を見た！」

リンク「テメーのようなブタおじわんと音速マッシュチョマンにて、寄りつく女がいるかよ？（ジッコミ）」

ビシッ…つとリンクが一人のムサイ一人組にジッコミを入れた時、すぐ横から走るマント無し版のマルスが自信満々の表情で、リンクとおっさん共のジッコミ戦争へと乱入する。

マルス「フフフ…僕なら一人ぐらい作れる自信が…」

キラリー…と、マルスの蒼い髪を右手で少し払った時の効果音を付けたような動作を、リンクとおっさん達に見せつけていた時…

ゼルダ「私も同意しますよ、リンク。（黒）…それと、ナルシスト王子は少し黙つてくださいな。なんか気持ち悪い、つーかキモイ。」

(ボソッ)「

ゼルダ以外の仲間達全員「「十分聞こえてるつて。腹黒王女様（汗）

「

ゼルダの腹黒いセリフを仲間達全員、額に冷や汗を流しながら聞いて、いろんなグチとツッコミを叩いているのだが…

これでも彼らの本当の姿は、世界の秩序を守る正義の英雄軍団『スマッシュ・ブラザーズX チーム』であり、日々の乱闘はこの非常事態に備えての鍛錬であつて観客側だと彼らの乱闘を楽しむ表姿に過ぎない。

全員「マスター！！」

バタンッ！

マリオ達が作戦会議室の扉を開けて様々な機械を弄くりまわしてい るマスターに言った。

マスター「来たかお前達…総員に言つ…緊急指令だ…！」

ウイイン…

マスターが仲間達に振り返った時部屋の中央から機械音を出しながら大きな円型のレーダーが現れて、大きく点滅している箇所に人指し指を差してマリオ達に言った。

マスター「今晚23：55分に英の国から緊急信号SOSが入った。一匹の未確認生物の襲撃があつて交戦したものの、都市・英の国の

軍：八割以上が壊滅した！！すぐさま向かつて市民の救助・未確認生物の排除を願う！！

マリオ「な…何だつて！？英の国つてつい先ほど夕方に俺達と交流したばかりなのに…！！！」

サムス「てか…八割以上つてどんだけ強大な敵なの…？」

英の国は現実世界(アコティードワールド)の最大軍事国家であつて武力・政治的にも圧倒的に強いはずなのに、一匹の未確認生物で壊滅されてしまつほどの無力が出た事実にマリオとサムスは驚く。

リンク「軍でも適わないありえない生物つて…つおい、ネス…！」

タンツ！ヒュオオ！！

リンクが驚愕の声を上げていた時、ネスはテレビ・ニュース番組として外へ飛び出し、低空中飛行しながら英の国へ繋がるトリップゲートと一人向かう。

マスター「もう既に英の国へと繋ぐように設定した！出来る限り急いでくれ！！」

マルス「言われなくともわかっていますよ！」

カービィ「ネスティー待つて！！」

フォックス「ファルコ！アーウィンの手配を…！」

ヨッシー「ヨッシー（スーパードラゴンになるです…）」

マリオ「まつたくアイツはー！」

仲間達はマスターの声を聞くまでもなく、瞬時に外へと飛び出し一同は一人トリップゲートに向かっていったネスの後を追つた。

マスター「（守らなければ…出来る限り彼らに手助けをしなくては…）」

彼は想像世界オリジナルワールドの神。神は一切手を出してもならず、無闇に必要が無い限り人前に現われてはいけないのだ。

スマブラメンバーが全員居なくなつた後マスターは、再び機械をいじくりまわして破壊を招いた元凶を探つていく。

マスター「（これが！？）」

カチッ！

気になる強い波動がマスターのいる作戦会議室の機械を通じて警告音を出した。

マスター「（凄まじい霸氣だ。…何者。）」

強い波動を出す座標どころでモニターを映すと…

マスター「あ… あやか… そ… そんな…」

モニターに映る紅蓮の世界に一匹だけ空中浮遊している白いロープのよがりなどを全身に覆った生物を見て、顔は無いものの言葉は悲しみに包まれていた。

マスター「…」

マスターはへナへナと冷たい機械に寄りかかって涙でも流しているかのように佇んでいた。

私は…認めぬ…認めぬものか…！…壊滅した正体が『  
だと…』

…トリップゲート ワープ中…

ネス「（まさか…信じられない…）の…とは…っくー。」

複数の光が高速に流星のように前へと走り出す中、ネスは先ほどの交流会で出会った女の子のこと思い出して苦笑する。

回想 …スマッシュワールド すま村 トリップゲート前…

ロイ「それじゃあ皆さん、帰宅の旅路気をつけてください。」

ルカリオ「また…そなた達に出来ることを、楽しみにしてる。」

ロボット「ミナサンオゲンキテ、マタアイマショウー。」

ワリオ「ぬつはつはー…また会った時は、俺様専用と・つ・て・お・  
き・のシヨーを見せてやるからなー…。」

ルイージ「ト品のシヨーと間違えてんじやねーの? (ツッコメ)」

ワリオとルイージのコントが流れながらでも、英の国の住民達がマ  
リオ達に見送られながら、一人又は家族達がトリップゲートの中に  
入っていく。そんな中…

プライの母親「有り難うござります。家の娘が貴方様有名人に迷惑  
をかけて…」

マリオ「いえいえいえいえ(汗)、僕達は貴方達が住まう世界の人  
々が大好きなんです。迷惑なんて誰も思っていませんよー。(笑顔)」

栗色の長い髪を流すプライの母親と父親が、ペコペコとマリオ達に向かって頭を下げる。

スマーブラメンバーのリーダー『マリオ』が、頬が少し赤くなりながらでも軽く両手を前に出し何度も横へと振るつて、迷惑をかけていない仕草を取つた。

プライの父親「本当にすみません。田を離した隙にこの子は…」

ネス「そんなに謝罪しなくてもいいさ。子供は最初のうち、色々なところへと興味心身に足を運ぶからね。まあ、無理もなこさ。（笑顔）」

ネスがマリオをフォローし、続いてアイクが手を組みながら、プライの両親に向けて続きを言つ。

アイク「何かと触れ合い、何かと行動することで人は成長し、自然にと身に付ける物だ。いろいろとこの娘に、今にしか出来ない事を教えてあげる。」

プライの両親「あ…はい。」

ガヤガヤ…

英の国の住民達が8割ぐらいトリップゲートの中へ入つて数が少なくなった時に、プライの両親は娘の手を繋いで一緒にトリップゲートへと入ろうとした時…

プライ「お兄ちゃん…！」

ネス「えつ？」

プライが突然親の手から離れてネスの元へと慌てて走り寄る。ネス

は少し驚いた表情で近くまできたプライを見つめた。

プライ「お兄ちやんにコレをあげるのを忘れてたら、……はーーー。」

ネス「ん?…これは…」

ネスは手渡された物を見ると、手作りなのだろつか星屑のよつに太陽の光で光る赤色の糸で結んだ輪…

どつやう、手頬に付けるリング?のよつな物らしい。

プライ「あたし特製の『お守り』だよーあたしはキラキラに光る空色の輪だもん!—」

見て見てー…とも言つて居るかのよつ!プライが、右手首に付けてこの空色の輪をネスに見せつける。

ネス「また君と再会する時に、付けていれば俺がどこにいてもわかるって言つんだろ?」

プライ「やうやうーあたしが観客席で試合を見る時ゼンゼンこじても、お兄ちやんが付ける赤い輪で見つけられるんだからーーー。」

プライが笑顔でネスにそう言つた時…

少女?『これはね…』と、私が、世界のビックで再会した時に付ける物なのよ。』

少年?『約束の輪…と言つのかい

?』

少女？『そう…遠い世界にいても、また再び  
…祈りと愛を込めて付ける物なの。』

少年？『祈り…愛…  
と再び出会えるなら、僕は…』

ネスの脳裏に少女と少年の声が響いて、映像は雪のよつと白くて何  
も見えないが…

ネス「（こつまに）」  
「来てたんだろ？」

どうやらネスの精神が現実世界から心の世界に自然にダイブしたら  
しく、自分の体を見ると全身が服ではなく裸であった。

ネス「（）の姿は3年前の冒険以降だつたな。だけど…」

サワツ…

足元に生えている花のような物が風でゆっくりと揺らぎながら、一  
人は楽しく話しているように精神体のネスは感じじる。

ネス「（心の国）マジカント』は、消滅したはずだ…』

ネス精神体が少し頭を傾げ、顎に手を当てながら悩んでいた時…

?『化け物が  
と一緒に生きるって？そんなの有り得ないね！』

!』

?『化け物は大人しくどつかで勝手に息絶えればいいんだよ！－！  
は僕達の者だ。』

?『…………に触るな化け物。化け物は燃えるように消えてしまえ。  
つーか僕達の世界すら存在するな。』

ネス「なつ……！？」

突然、世界が純白から黒い暗闇に変わって、満ち憎しみと怒りと苛立ちが混ざった声が入って、ネスは声がした方向へと体を向ける。

ネス「！？」

?「よお化け物ん。久し振りだなあ？？」

暗闇の中から現実世界でも見かける少年が一人現れる。ネスは目の前に現れた少年のことは知らないが…先ほどの過去の残像と声で脳に電気が、少量走ったかのような感覚が走る。

ビリツ…

少年「？？頭が痛いのかい？？カツコイイ顔が鬼のように歪んでい  
るよお？？…クスクス。」

ネス「う…………く……。」

バチツ…

先ほどよりも強い刺激が目の前の子どもが笑う度に脳裏へと受ける。

ネスは額に左手を当てながら脳裏の痛みを和らげようと、頬に流れる汗を流しながら少し身体を揺らす仕草を取った。

ネス「はあ……ハア……だ……誰なん……だ。」

少年「嫌だなあー。僕のことすら忘れてしまったの?…ビニにも見かける老人みたいに…アハツ！」

少年は笑いながら、自分の腹に向けて手を掴むように触る。その後…

ブチブチブチ！…ブチュチュチュ！…！

ネス「つ！？」

目の前の少年が自ら肉を剥がすように右腹から左肩まで斜め一直線に引き裂いた。

ボトボトボト…

噴き出す紅い液体の中に、内臓と肝臓と胃と小腸・大腸等の臓器が滝のように地面へと零れ落ちる。

少年「お前…昔はこいつやつて僕達にやつたじゃないか…君の手で僕らの体を、引き千切るよつに引き裂いて…そりに…」

グシャアアアアツ！！

少年が頭部に手を当てた途端爆発し、粉々に分解された脳と髄液と両眼が飛び散る。

少年「脳天をかち割つて、顔さえ原型が分からなくなるほど、グチャグチャにしたじゃん？？そして、「

ドスツー・ピシャツ…

鈍い音が響き、頬に何かが付いた感覚を覚える。ネスは嫌な予感を感じながら少しづつ目を開くと…

ネス「！…？…！…？」

少年「君が持つその武器で…僕達の を殺したんだよ？？」

目の前には朧げな深海のような蒼い瞳でネスを見つめる、金髪を流し白いワンピースを着た少女。少女の胸にはネスが持つていてる空色の剣が、少女の背中まで刺し貫いていた。

少女の白い服が段々と紅く染まり、口から少しづつ血を流していく。

ネス「ち……がう……お……俺は……」

少年「違わないよ。だって君は…」

ガシッ！

突然先ほどの少年が原型すら留めていない人の体で、ネスの肩を掴む。

人だつた者A 「君は惨殺者。」

違う！

人だつた者B 「君は破壊者。」

違う！

人だつた者C 「君は怪物。」

違う！

人だつた者D 「君は……」

ちが……！

少年だけではなく、地面から少年と同じように原型さえ留めていないグロテスクの死体達がネスの手と足を掴んでいく。そして死者達は同時に言つた。

人だつた者全員「黒き魔デーモンだ。」

ネス「や…………め…………！」

ネスは手・膝を地面につけて、息を荒げながら脳裏に響く呪詛のよ  
うな言葉を拒絶するように頭を横に何度も振る。

だが、纏わりつく死者達は容赦なくネスに言つ。

人だつた者E「君に拒否権なんてない。」

ネス「め…………る…………！」

セ

人だつた者F「君は世界の敵だ。」

ん

ネス「や…………め…………る…………！」

ぱい

人だつた者G「君は地球神ガイアさえ見捨てられた哀れな子。」

せん

ぱい

ネス「やめろおおおおおおおお…………！」

先輩…………！

リュカ「先輩！」

マルス「ネス君！！」

パカツ！パカツ！パカツ！

ネスははつとなつて声がした方向に顔を向けると、平らのどせいさんの形？をした馬のように動く、ちゃぶ台の上にリュカとマルスが乗っかりながら空中飛行するネスに追いつく。

ネス「リュカ…マルス…」

リュカ「先輩早いですよ～！もう一人で先走っちゃ駄目です～！」

マルス「そうだよネス君」

ヒュウウン！

すると今度は飛行しているネスの隣に白い戦闘機、「アーウィン」が現われてファルコとディディーが一人乗りしながらネスの動きにあわせる。

ファルコ「あいつの言つとおりだ。もうあのよつな出来事は見たくないからな～！」

ディディー「そうだよネスう！」

キィイイイン！～～～

すると今度は伝説の乗り物『ドラグーン』に乗っているカービィが現われてネスの左側に寄る。

カービィ「ネステイー！僕らも同じだよーもつ無茶な真似はさせないからーーー！」

仲間達「同じくーーー！」

「オオオオオオ！」

更に後ろから「ファルコンフライヤー」「スター・シップ」「オリマーの船」「スーパー・ドラゴンヨッシー」が現われて全員がネスを守るような形で囲んでいた。

ネス「みんな……」

更に赤い帽子に翼が生えた羽マリオと背中のイカロスの翼で滑空しているピットが、ネスと同じように飛行しながら寄つて来る。

マリオ「ネス……お前だけじゃないぞ。先ほどの交流会で多くの友達になつた者達を心配しているんだ。決して……一人で抱え込むな！一人で悩むなーーー俺達が心配してしまう、あの時のようにな……」

ピット「そうですよ。僕も……先ほど友達になつた子を心配しているです。それにネスさんはもうあの時以降、どのような怪我を見たくありませんからね……」

ネスは前回の出来事を思い出し少し目を閉じる。

あの時は…自分の腕が粉々に吹き飛んでも構わなかつた。

過去に…Jの手で自我を無くした自分が、無差別に人を殺して…

三年前…マリオ達にマスターに頭脳を操られたとはいえ…敵として彼らと戦い、多くの仲間を傷つけてしまった。

いつそ…この手が無くなれば、自分が死ねば、誰もが傷つかないで平穀な時間が与えられたはずなのに…

ネスはそう思いながらでも、心の中で惑いを焼き消すように冷静を取り戻していく。

だけど、Jの力は必要であつて…

内心は…死にたくても、死ねなかつたんだ。

昔、『』との約束した言葉と…

自分が必要としてくれる仲間達の声が…

自分を先へと導いてくれる…。

三年前の地球を救う旅でそのことを思い知り…

続いて二年前の、オリジナルワールド想像世界の危機から救うために、力を使つた。

人を仲間を…… が愛した世界全てを守るために……

ただ、これだけの理由なんだけど……

この一つの理由が、一番大切なことであり……

どこの世界の人でも誰もが持つてている

戦う理由の一つだと、『』ことを……

この何気ない理由が……

過去に縛られていた人を、水を流すように前向きへ導いてくれる……

当時の12歳だった俺は、誰かさんの受け折りで、ようやく気が付いたのだから……

ネス「……やつだね。」めんねマリオ…ピット…それにみんな……」

ロイ「仲間だからさ 少しは落ち着こいつぜネス……」

マリオヒーローとロイの言葉を聞いて少し頭を冷やした後、田を真っ直ぐに向けて遙か先に見えるワープの出口を見つめた。

ヒュウウウウウン……

サムス「ワープ抜けるまで、あと10秒!」

スター・シップに乗つてゐるサムスがそう言つた時、仲間達は意を決して身を構える。

… 9

8

7

6

5

仲間達は強い光溢れる出入り口を見つめて、これから映る風景を一瞬想像する。

4

3

2

1 !

視界がホワイトアウトになつて、ネスは一瞬目を閉じた。

0 ! !

バシュウウウウン！！

ワープから抜けた音が鳴つて少しづつ田を開くと……

地上・空が血のように赤く染まつていて……

コンクリートの壁が、ボロボロに崩れ落ちたビル等の建物達。

大量の血痕がペンキを大量にぶちまけたぐらいに付着したビルと、道路と交通整備等。

無残に転がる現代兵器だった物の亡骸。

グチャグチャに引き裂かれた臓器類。

骨を碎かれ原型さえ留めていないぐらいに四散した腕・頭・足・体。

戦場のような真紅の世界が広がつていた。

to be continues . . .

次回からようやくあの人を出します。  
更新も亀並みになるかも知れませんが、しばらくお待ちください。

やつと更新・・・

前半は第一主人公「マリオ」、後半は第三主人公「リンク」がメインとなります。

第一主人公「ネス」は冒頭しか出できません。（謝罪）

酷い残酷描写とやや女性向け文があります。閲覧上注意ください。

## Scene 4 The world of purgatory with

屍と肝と嘔きが多く地上へと重なり…

祈りの声さえ届かない…

地獄よりも過酷な世界…

『煉獄の世』と云われている。

そこにあるのは救いを求める光か…

それとも、絶望の闇か…。

…現実世界 英の国 中央都市RZ グリーン公園…

ルイージ「な…なんだよコレ！」

ピット「うつ…」

仲間達が降り立つた場所『グリーン公園』には、元は緑一色で覆わ  
れてた広い公園が、鉄の臭いと尿と糞の臭いが充満していた。

多くの遊器具が血と臓器が絡め合つたりこびり付き、緑の芝生が  
人の血と肝で赤く染め上げられて…

所々に転がっているかつては人間だった者の死体が、無残にも積み重ねた状態で放置されていた。

ピットとルイージはグロテスクの死体をそのまま見たため、口を手で覆つて吐き気が首から上へ通して襲つてくる。

ゼルダ「つべ…なんてひどい…」とを…

サムス「(いけない…こんなときに吐氣が…)

マリオ「つー…とりあえず捜索だ!まずはチームに分かれて一般市民の救助に向かうぞ!…」

マリオ以外の仲間達「つー…マリオー?」「

ゼルダの声を聞いてリーダーであるマリオは、仲間達全員が恐怖と驚愕と困惑に陥る前に果敢なる指摘を出した。

マリオ「生存している市民を見つけたら、すぐにトランシーバーで連絡!この都市を襲つた敵をぶつとばすのは、市民を出来る限り救助してからだ!…」

仲間達全員はマリオの指摘でやるべきこと理解して、一瞬の内で我を取り戻した。

リンク「御意!」

ネス「OK!」

マルス「了解した!!」

仲間達は瞬時にチームに分かれて走り出し、マリオチームは北方面・リンクチームは東方面・マルステームは西方面・ネスチームは南方面へと散開した。

…現実世界 英の国 中央都市RN 北方面 高層ビル通り…

マリオ「くそつ…酷いことしゃがる……」

グシュツ…グチュツ…

マリオは道路や高層ビルの壁等に付着した血と、破れ掛けた腸と臓器の修羅のような世界にたつた一人だけ…立っているような感覚を感じる。

破裂した内臓と血を踏み潰す音を立てながら険しい表情で生存者を探す。

オオオオオ…

耳に聞こえる不死者のような声、肉の組織と骨が見えるぐらいにグチャグチャに崩れた片腕を、上空に浮かぶ赤い月へと伸ばしている死体が幾つか道路に転がっていた。

マリオ「（道路全体まで人を、壊れた玩具を遊んだように投げ捨てやがつて…見つけたら容赦しねえ！）」

ギツ…

両眼を抉つたように道路へと抜かれ落ち、ブチ撒かれた血と内臓と死体を見て、マリオは静かに右拳を強く握る。

心中で沸々と無差別に殺した敵へ怒りを込め上げながら…

マリオ「（あれば…。）」  
数歩き行く手を阻むスタンド類を退かしたところで、積み上げられた瓦礫の間に見える肌色のような細い物が見えた。

マリオ「（人の手か！？）」

グジュッジュ…ピシャピシャ…！

マリオは足元にあつた内臓や血を踏みながら、瓦礫の間から出ている肌色のような細い物へと走り寄る。

マリオ「（やつぱり人の手だ！それに、まだ暖かい。止血さえすれば…。）」

瓦礫の間から出でている手を、マリオはすぐさま手首辺りに握り絞めて脈拍を確認する。

トクッ…トクッ…

右親指に受けた命の脈動、微弱だったのだがそれでも人が生きている証明なのだ。

マリオ「（それにしてもでかい瓦礫だ…。流石に俺一人じゃあ持ち上

げられない。下手に助けだそうとして十八番のスピンドルをやつたら、瓦礫の間にある空氣穴を塞いでしまう。」

マリオは田の前にあるバカでかい瓦礫を見て、一人での救出は困難だと瞬時に悟つた。

マリオ「（近くにいるドンキーなら、退かせるかもな。クッパは今ルイージとワリオと一緒に、此処から遠めの病院へ向かっているし、姫様は上空にいるし…）」

マリオは腰に掛けてあつたトランシーバーを取り出して、「ドンキー＆ティーディ」へ通信を開いた。

マリオ「ドンキー、ティーディ！－生存者発見したんだが、俺一人では退かせない大きな瓦礫があるんだ！至急俺の処へ来て、手を貸して欲しい！－」

ドンキー『ウホ！？ウホホオオ！－（マジで生存者を発見したか！？よおし、ちゃちやつとアンタんトコへ行くぜ！－）』

ディディ『わかつたよー！－今テパートの屋上辺りにいるから、すぐに向かうね！－』

マリオ「急いでくれよ。田の前にいる人の命が消える前にな…」

マリオがそう言つてトランシーバーを切り、自動的に電力節約モードに入る。

瓦礫の穴から出でてゐる腕に付いてゐる傷口に向けて、腰に付けていた四角い形の応急セットから「ガーゼ」を取り出す。

マリオ「（やつと見つけた命なんだ！）」死なれたら嫌なんだよ……。」

マリオは心中でそう呟く。傷口部分にガーゼを押さえて、圧迫止血を行っていた頃……

…現実世界 英の国 中央都市RIZ病院内 1階…

ガラツ！ボコッ！！

クッパ「まったく、我輩はこんな汚い壊し方はせんぞ！我輩ならちやんとボツコボツコにカツ良くな登場することを考えて……」

ワリオ・ルイージ「（同じだろーが（汗）それは置いといて、そんなこと考えている場合じやないと思ひんだけど……）」

所々に転がっていた瓦礫をクッパの怪力で退かし、強引に病院の中へ入る。病院内外と同じ死体と血で埋め尽くされ、天井・壁にも血がこびり付いていた。

ワリオとルイージはクッパに向けて心の中で突っ込みながらでも、手で瓦礫を退かし生存者を捜索する。

ルイージ「…ほ…本当に…いい…生きている人、いるのかな？…何処見ても死体だらけだし…」

ルイージは両手を胸に当て全身体にガクガクと震えさせながら、

鮮血に染まつた病院内の周りを見る。

ワリオ「ん? パソコン一つ付いているぞ。と言つひとは…」

ワリオは硝子越しに光が出ている処へ目を向けてドアの上にある看板、『ナースステーション』に目を付ける。

ワリオ「配線状況と、起つた惨劇の情報がログとして残つているかもしれないねえ。」

ルイージ・クッパ「マジ?」

ルイージとワリオとクッパは、散乱した書類と死体と医療器具をかき分けながらナースステーションの中に入り、一部のパソコンが点滅している処へと寄る。

ワリオ「ンフフ、電力辛うじて生きているぜ?... それと、配線機能はどうかな?つと...」

カタカタカタカタカタ...

流石盗賊と言つたか、手なれた手付きでパソコンのセキュリティを解除し、電力・配線状況を見る。

ワリオ「んー、大半死んでいるが... 一か所だけ生きている配線があるようだねえ。」

クッパ「そこは何処なのだ??」

ワリオ「此處!... なんだが。」

パソコンに映る生きた回線を田線で辿つて見ると…

ルイージ「しゅ…手術室！？それに地下一階だし…」

クッパ「だが、壁に付けてあるナースコールが、『しゅじゅつしつ』のランプ点滅しているぞ？」

クッパの言うとおりパソコンから数メートル離れた壁の所に、ナースコールの端末の一つである『手術室』のランプだけが、数回点滅を繰り返しながら光っていた。

ワリオ「ナース生存者がいるんだよ。多分な、フヒヒ…さて、情報はつと。」

カタタタタタタ。

記録の情報を見つけるために、キーボードを打ち込むワリオだったのだが…

パソコン画面『An illegal input detect  
ed it. It returns it to the last screen at once for the security protection. (不正入力が検出しました。  
セキュリティー保護のため、前回画面に至急戻します。)。』

ワリオ「あ？、なんだよ、こんな時にヘンテコロツクだあー…？？こんなのすぐに…あん？なんだあー…？」

突然アラート音が鳴り、先ほどまで見れた映像が急にひとつ前の画

面へと変わる。ワリオは苛立ちながら先ほどの画面へと戻すよつにキーボードを打ち込んだが…

パソコン画面表示『”Password” that you input is different. It inputs again and is stinky.（パスワードが違います。もう一度再入力してください。）』

ワリオ「ツチ！クソ！…コイツウ！…！」

ルイージ「どうしたのワリオ？！？！」

クッパ「何かあったのか？」

何度も何通りかのセキュリティ解除のコマンドを打ち込んで、ひとつ前の画面・先ほどの画面に何度も戻し、戻されての無限ループかのように繰り返し作業があつたのだが…

パソコン画面表示『”Password” that you input is different. It inputs again and is stinky.（パスワードが違います。もう一度再入力してください。）』

ワリオ「コリヤ駄目だな…流石にコイツは俺様でも解除できねえ…」

ルイージ「そんなあ…」

先ほどよりも強力なセキュリティが掛けられ、流石にワリオでも両手を広げてお手上げ状態になった。

ワリオ「つたぐ、地下に行くルートは瓦礫で塞がれているし…」

クッパ「更に、電力不足でエレベーターさえ使えない… ようだな。」

ワリオとルイージとクッパはナースステーションから出て地下へと続く経路を見たが、もちろん階段が瓦礫で完全に塞がれており、エレベータを見たクッパが何度も開ボタンや階ボタンを押しても反応しなかつた。

ワリオ「…まるで俺様達の救助を困難させるような…計画的にやつたような気がするんだが。あのセキュリティも偶然とは思えない…」

クッパ「何！？… それじゃあ、吾輩達が退かした瓦礫の一部も… もしも吾輩達のすることを読まれているのだとしたら…！？」

ワリオは額に人差し指を当てて少量汗を流しながら、困惑した表情で先ほどの事を思う。

クッパもワリオが言った突然のセキュリティー発生、道中の行く手を阻む不自然な瓦礫の位置のことを…額から汗を流しながら思った。

ルイージがどうせにやるべきことを言い、ワリオとクッパはルイージの言葉に顔を少し下げて頷いた。

ワリオ「ふんつ、田蔭者が言われなくてもわかつておるわい。」

クッパ「そうだな。手間が掛つてしまつが、吾輩らの手で瓦礫を退

かしながら進む他にない。……永遠の「一番手の任せに（ボソッ……）」

ルイージ「ちよつとー（汗）永遠の「一番…いえ、日蔭者つて言  
わないでえーー（涙）折角の僕の良いところがああ…うわああん。  
〇ーン」

ルイージは両膝を折つて左手を床に付けて、もう片腕を何度も床に  
叩きながら滝のように涙を流して落ち込んでいた。

まあ、そんなことは置いて…（ヒドイな作者（笑））

ワリオとクッパは地下へと続く階段が塞がっている瓦礫を、手で退  
かしていた頃…

ヒュウウウ…

ピーチ「周りが赤…赤…赤だらけで怖い…わ。けれど、見つけなく  
ちや…」

桃色の傘片手で持ち桃色のドレスを着た姫君「ピーチ」が、上空か  
らピーチ姫限定だけ与えられた特殊能力「空中浮遊能力」で、北範  
囲を広く旋回しながら生存者を探していた。すると…

?「グオオオ…オオン?（どうだい姫さん。見つかったか??）」

ピーチ姫の隣へ向けて飛行しながら近寄つて来る、尾に炎を宿し才

レンジ色の体を持った大きな竜「リザードン」が寄つて来た。

ピーチ「いえ、まだ見つかってはいないわ。北側の周りを空から何度も見ていろけど…」

マスターがネスのテレパシー能力を利用して戦士達の為に作った、ボケモノ生物等の言葉が分かる通訳機テレパフォンで、隣のリザードンにピーチは話しかける。

通訳機テレパフォンはミクロ単位のサイズなので、外見から見ても分からぬうに設計されているのだ。

ただし、通訳機テレパフォンといえども人間の英訳等は対応していないので、改良版ができるまで待つていてほしい。（Seaconでネスとリュカの和訳がされてなかつたのは、その理由である。）

リザードン「グオオオ。 （なら、東方面へと移動しよう。そこで俺達と同じように探している「ピット」が居るはずだ…。）」

ピーチ「そうね…。彼に会つてみて聞いてみましょ。なにか情報を持つていろかもしれないし…」

ピーチは桃色のドレスの腰に付いている小型のトランシーバを手に取つて、マリオとポケモントレーナー『レッド』に通信回線を繋げて報告する。

マリオ『…わかりました。姫様、お気をつけ…。』

ピーチ「有り難うマリオ…。」

ポケモントレーナー（通称レッド）『…了解した。リザードン、生存者の探索とピーチ姫の護衛を頼む。』

リザードン「グオオオ。」（分かっているゼロ那。女を守るのは男の勤めだからな。）

リザードンがそう言った後ピーチは通信機を切り、隣にいるリザードンと一緒に東方面へと向かっていった頃…

：現実世界 英の国 中央都市RN 東方面 ショッピングモール  
内部 2階：

ゼルダ『リンク、ヨッシー、そちひざどうですか？？』

リンク「いや駄目だ。」  
「…」

ヨッシー「あううう。」（同じくです…。）

ゼルダとリンクとヨッシーは無線で連絡を取りながらモール内部の一つである、洋服売り場？らしきところで探索していた。

リンク「呼吸音すら聞こえていない…聞こえているのは嘆きと、何の感情もない風だけなんだ。」

洋服具売り場に千切られた腕と頭が割れた積み重られた死体達を一時目を閉じ両手を合わせる。

リンクとヨッシーは少し通信相手であるゼルダに少し話した後、腰

に付けてあるトランシーバーをオフにして洋服具売り場を後にする。

リンク「本当にクソッタレだ…こんなことをした奴をつ…」

ガンッ！

リンクは怒りの感情のばかりに、近くに転がっていた空のごみ箱を、右足先で思いつきり何処かへと蹴り飛ばした。

その後に血が付着していないう壁に右手を当てて、目を閉じ顔を下へと向けて俯くような形を取る。マッキーは瞳を半分閉じながらリンクを気にするかのように傍に寄る。

トランシーバーをオフにする前に、ゼルダが言つた一言を…

見つかったのですか…貴方の仲間トモダチ…

リンク「…。」

ヨッシー「あうう。（もつ…ボクたちが来た時、もつ…）」

クッパ達が病院内へ入る数時間前、リンクチームはモールに到着した時、あまりにも内部が広いため探索時間を縮めるためにリンクとヨッシーは、個別の階ごとに分けて散開させたのだ。

地下一階にいくガノンドロフとマグニムウォッチ、一階を見回るオリマーとロボット、三階に行くゼルダと四階に行くサムスとファルコンと別れて、二階の用器具店が並んでいるフロアへと入りこん

だ。

…回想  
東方面  
ショッピングモール内部  
2階  
用器具販売フオ  
ール…

リンク「おい！誰か生きている奴、返事しろー！」

ミシシード（助けて来ました！返事をしてください）

リンクとヨツシーは大きな声を掛けながら、所々に千切れた腕と半分無くなつた頭が四散している用器具専門店のフォールを探索する。

オオオオオ グチヤ グチ

しかし返つてくるのは不死者ソンビのような声がする風音のみで、床にこびり付いている血や破れた大腸・小腸・肝臓等を踏む音で寧ろ…

故郷の危機を救つた百戦錬磨のリンク・幼いマリオから今までずつと見守つてきたヨッシーでも…

それとは違つて、彼らの空想世界には無い「恐怖と絶望」が現実的  
にだんだんと内から増していく。

リンク「（くそ…俺の故郷にどこらでもいるモンスターと何度も果敢に戦つていいとはいえ…これは別物だな…）」

ヨッシー「あうう…うう…ボクの故郷に居る、ウンババよりも怖いですぅ…（…）」

ピチャッ…

天井に付着した大量の血痕が、雨上がりのような雲のようにな床へと滴り落ちる。だが、歩みを此処で止まるわけにはいかない。

彼らは戦士。スマッシュ・ショットラザーズ力なき人々を助け、悪しき者を叩き潰す正義の軍。その誇りを汚すわけにもいかない…今でも救いを求めている人々がいるハズだから…

トンッ…

リンク「ん?…ヨッシー?？」

リンクの背中に、何かが当たる感覚を覚える。顔を後ろへと向けると、ヨッシーの顔がリンクの背中を擦りつけるように寄つていた。

それだけでなく、リンクの緑の衣を両手で掴み、思いつきり力を入れて緑の衣に皺ができるほどしがみ付いていた。

ヨッシー「ううう…（少し…だけでいいです。…）のまままでいさせ…てくだ…さい。）」

リンク「ひ…。」

背中にブルブルと振動が走る。ヨッシーは周りの地獄のような風景で恐怖し、震えているのだ。

リンク「（こんなに齧えて…俺も正直、メチャクチャ怖い…こんな世界じゃあ、一人でも正気に保てそうになオレよ。だけど…）」

リンクは心中でそう咳いた後振り返って、震えているヨッシーの下半身から頭部までそっと左手で摩り、両手だけでなく体全体を使って、両足を折つて半立ちになり、ヨッシーの体を優しく包むように抱きしめる。

ヨッシー「あう~。（リンクさん？？）」

リンク「齧えるなよ…俺だって怖いんだ。俺の手を見ろよ…ほら

…」

ヨッシーは目だけ動かして、自分の体を掴んでいるリンクの手を見ると、手が僅かに微動しながら蠢めいている。

勇者とか戦士でも関係なく…リンクも人間の一人として、周りの世界に恐怖し、怖がっていたのだから。

リンク「怖いのは当たり前や…この煉獄のような世界の中で懸命に探している仲間も…同じ思いをし、感じているから。だけど…」

地獄のような世界にいてもリンクは穏やかな表情で、半分涙をため

込み今でも泣きわなになつてゐるヨッシーを、見つめながら言つ。

リンク「一人だつたら絶対に耐えられない。だが俺達は複数いるんだ。  
…仲間<sup>ヨツシ</sup>が近くにいるだけで安心するんだよ。」

ヨッシー「あひ…（リンクさん…）」

リンクの真剣な眼差しで、ヨッシーは掴んでいた手に若干力が自然に弱つていくのを感じる。それだけでなく…

体全体にガタガタと震えていた恐怖さえも、鎮つていく感覚も覚えたのだから…。

ヨッシー「ヨッシー…（リンクさん…ボク…）」

リンク「大丈夫かヨッシー？まだ、震えがあるなら…もひちよつと…宥めたほうが、いいかな？？」

ヨッシー「ヨシヨシ。（もう大丈夫ですよ。あ…あつがとうござります。）」

リンク「いいさ、乱闘以外俺達は仲間だからな。」

リンクがそう言つた後、ヨッシーの頭を数回摩つて立ち上がりうとした時…

…。  
…

リンク「…」

ミッキー「ミシ? (ビリしました?)」

リンクが突然右手を右耳へと寄せながら、顔を周囲を見渡すような動作を取ったのを見て、ミッキーは啞然としながらリンクに向かって言つ。

リンク「声が…。」

ミッキー「ミ...ミシ?...! ? (声?...ミー...)」

ミッキーも首を下へと上げて注意深く耳を澄ませると…

……  
て。  
……  
て。

ミッキー「あ...。」

リンク「静かに」

無音に近いが、決して彼らに聞こえないわけではない。さらにリンクとミッキーは静かに耳を澄ませる。

……  
け  
……  
て

……  
す  
……  
。

……  
た

……  
。

リンク・ヨッシー「…。」

…………す……け

…………て。…

ヨッシー「ヨッシー…（リンクをん…）」

リンク「ああ、聞こえた…」「か！？！？」

バシャバシャ…

床に水たまりのよう付いた血痕の上を踏みつつ、一人はかすかな声がした方向へと瞬時に全速力で駆け巡る。

リンク「（声から聞くと、だいぶ弱って来ているな。だが…。）」

ヨッシー「（まだ間に合つハズ…です…。）」

バシャバシャバシャバシャッ！ガコッ…ブチユッ…ブチッ！  
！！！

床に落ちている壊れた用器具や千切れた腕の一部や臓器を、氷の上で滑るように猛スピードで走ってきたリンクとヨッシーの風圧で、大きく横へと吹き飛ぶ。

曲がるところで互いに右足を軸代わりに前へと伸ばし固定した後…

バシャシャシャシャ…！…！

床に滴る血の海を弾きながら、全身を捻るように捻じつて急ブレーキを掛ける動作を取った。

リンク「見つけた！…！」

目の前に用器具の陳列棚が折り重なるように、倒れていた中間部分に…

? 「…たい…よ。…た…すけ…て。」

左腕の部分と右額部分から血を流し、用器具の陳列棚に挟まれ場所はやや薄暗かつたが、

夕方の交流会で出会った栗色の髪を後ろへと流し、オレンジ色の服を着た子供がそこにいた。

子供A「いた…い…よお…い…たい…。」

リンク「ディール！…もつ大丈夫だ。今退かしてやる…！」

リンクはすぐさま挟まれている子供、「ディール」の名前を言つて、数歩走り寄つたが…。

リンク「…！」

ミッキー「ミシミシ…あ…あ…あ…（びびしまし）…あ…。

ああ……」

突然止まって、ヨッキーは何事かとリンクの元へと寄つた時……

「ディール「いた……い……い……たい……よおお……。」

リンクとヨッキーは目の前の光景に、驚愕した。

全身に急激の震えと、両眼が飛び出でしまったぐらに大きく開いて……

二人は氷のように固まっていた。

その理由は……

遠くから暗くて見えなかつた物が、近づくと見える床に刺さつた鈍器……

巨大な鉈が、ディールの下半身斜め一直線に切断されていたのだから……

「ディール「ああ……い……た……いあ……あいた……ああ……いいたい……ああう……。」

「ゴボッ……ズルッ……ズズズ……。」

口から溜まっていた血を吐き出し、残った上半身から様々な臓器がヌルリと滑りながら出していく。

リンク「つーーーー！」

ヨッシー「あ……う。」

ディール「……い…………や…………ん。」

吉葉は途中途切れながら、両眼から苦しみの涙を流し血に染まった片手を、固まっている一人に向けて弱弱しく伸ばす。

リンクは心の底から湧きあがる後悔と救いきれなかつた思いに、半分顔がくしゃくしゃになつて涙を堪えながら、血に染まつた手を握り締める。

ディール「…………い…………な…………」

ないで。

リンク「…………む…………やつと…………見つけたのに…………なんぞ。」

握り締めている朱に塗れたディールの手が、段々と冷たくなつていく感覚……。

それはまさかもなく、永遠の眠つへと誘つむのだった。

ディール「

う…………を

握れ…………

「こよ。… れ… い。」

リンク「お…い、何言つてる…んだよ。大きくなつ…たら、俺と一  
緒…に、人の為…に剣を握りつと…言つたじやねえか。」

ヨッシー「ああ…う。」

パタタ…

「ディールの右頬に零が零れ落ちる。リンクはついに耐えきれず閉じ  
ていた瞳から涙を流し、言葉は嗚咽で途切れながら顔を下へと向け  
何も出来ないまま」「ディールの手を握り締めていた。

「ディール「よ。… も。… む、… や…  
ん。… も。… も。」

リンク「やめ… る… 閉じるな…。… 閉じ… るんじやねえ…」

スウ…

パシャヤツ…

伸ばした手が静かに血に染まつた床へ力なく落づる…

リンク「お…い… ひ… したんだよ… なあ…「ディール?/?」

そじり辺に転がる苦しみの表情でもなく、穏やかな表情を保つたま  
ま…

永遠の眠りへと旅立つていった。

リンク「やめよ。おこ、テール何が言えよ。お  
い……おー……」

リンクは半分冗談めいた表情でティールの顔や肩を手で何度も摩る。何度も摩つても、一度と語り合はしない…。

もう一度と、動こうとしない。.

もう一度と、瞳は永遠に開かない……。

リンクは顔を上へと上げて、故郷を救う冒険さえなかつた後悔と絶望を込め、声が枯れるぐらいまでに大きく叫んだ。

リンク「あべしゅう」誕生。

現実世界 英の国 中央都市RZ 東方面 ショッピングモール

ヨシシ一「あわわ…う（リンクさん…。）」

リンクの閉じられた瞳には涙が溢れ、雲が雨のように床へと零れ落ち、体を壁に擦りつけるような体形になる。

リンク「何で…俺達…」  
「ん…なとき…だけ」

無力なんだろう。.

といふべきの嗚咽が出る中、己の無力を心の中へとため込んでいた時……

? 「何を悲しんでおるのだ、小僧。」

ガツ

リンクの腰の辺りに固い物が、背中から強く巻き付く痛みの感覚を覚える。よく見ると鍛えられた腕であり、吹いている風でマントのような物も見える。

耳元に聞こえる声と今の状態は何なのか、もちろん理解できるのに時間が掛からなかつた。

リンク「ガ...ガノ...ンド...ロフ。」

ガノン「何故泣いているのかは我には理解できん。だが、これだけは言つておこづかう。」

ガノンドロフが壁に凭れ掛かっているリンクを、無理やり片腕で抱き起し、真剣な表情で前を見る。

ヨッサー「あ……う？（ガノンドロフ……さん？）」

?マークが頭部に浮かんでいるヨッサーを余所に、ガノンは顔を正面から上へと向けて、上空に浮かぶ赤い月と赤い空を細い目で見ながらこう呟いた。

ガノン「何時までも陰を引きずるままでは、何人も救うことすら叶わぬ。一つの陰の存在がある限り、己の使命さえ狂わせ、伸ばした手を掴み取る氣力を消してしまつ……厄介な物よ。」

ヒュオオオオ：

生暖かい風が黒いマントを靡かせ、漂う死臭がリンク達の肌に擦り付く。リンクは涙で赤くなつた両眼を自分の体を抱きしめているガノンの腕を見ると、少しばかり震えていた。

リンク「（震え……て……いるの……か？）」

ガノン「黄昏時……我は人間と共に酒を飲み交わす約束、……それすら叶わなくなつてしまつた。唯一の余興が見知らぬ存在に奪われたことに……」

リンクはガノンが言う言葉を聞く度に、大きく出でているのを感じる。顔は後ろを向いているので表情は分からないが…。

怒りと苛立ちを腹の底から、全てを外面へ叩きだしていた。

M「ゲームアンドウォッチ（通称ゲムオ）」「憤リト怒リヨ、ガノンサンモ、私モ…皆、腹ノ底カラ出シテイルノデスヨ。決シテ貴方リンクサンダケデハアリマセン。ダカラ…」

：一人デ怒リ、哀シマナイデクダサイ…。

ポンッと、リンクの肩にゲムオの黒い平面の手が軽く叩く。正面から見ても真っ直ぐの黒い棒しか見えないが…

その言葉は初期仲間の一人「ネス」と同じように暖かく、リンクの中で渦巻いていたこの世界での、深き闇の絶望と後悔の鎖が解けていく。

リンク「ウォッチ…俺は…」

ガノン「あ”ゝ…その、何だ…。何て言つか…う”ゝん。」

ガノンドロフが片手で額辺りを数回搔いて一瞬頬に赤みが出たもの、何かを言いださそうとするがなかなか思うように出ず、眉を細めながら少量汗をかく動作を取る。すると…

?「「我らは頼りがある『仲間』だから、一人で深く悩み、一人で他人の為に心を傷ついて、一人で感情を思つままに元凶の元へと走

つてはならぬ。」と言いたいでしょ、ガノン君？？」

? 「ソウテスヨ。アナタノ持ツ「ヒト」ナラテワノ人情ノ姿ナラ、  
ソウ言ウテシヨウネ。」

リンク・ガノン「え…? 「む? 」

ヨツシー・ゲムオ「あうー（あー）「君タチハ…！」

第三者の声がした方向へ体を向けると、一階方面を探索していたオリマーとロボット（通称エインシャント）が居た。

ガノン「む? 一階を探索してたではないのか? ?

ヨツシー「ヨツシ? ? (どうじこじこ?)? ?」

ガノンは一先ず落ち着いたリンクを離し、リンクは「うわっ」という声をあげて不安定な姿勢の影響か少し体がよろめいたが。

近くにいたヨツシーとゲムオの両手でリンクの両肩を掴み、よろめき倒れを防ぐ。

オリマー「一階の全てを見回ったのだが、ほぼ全滅状態だった。もう私達から見ると、生存者はもう〇%に限りなく近い…しかし。」

ロボット「ガノンサントウォッチャ、ソレヲ承知ノ上テ地下カラコヘ移動シタデシヨウ。ゼロニ近イ存在テモ、僅力ナ可能性ヲ求メテ…。」

リンク「そうだつ…たのか? …ガノンドロフ。」

ガノン「／／／！」

リンクがガノンのほうへ顔を向けると、ガノンは少し恥ずかしそうにリンクの顔から横へと向けた。

リンク「（あんたのような奴でも、そんな感情があつたんだな。ふうーん。）」

ヨッシー「（これは意外ですねえー。）」

ガノン「（むうううう、貴様ら…我をそんな目で見るな！…余計に我自身が丸くなつたではないかああ…あの時の私は遙か彼方へと何処に逝つた…むむむむむ（困惑））」

ゲムオ「アハハ！ソソナニ恥ズカシガラナクテモイイノ〜〜！」

ロボット「フム、人トハソソナ隠レタモノガ…後<sup>ヒタチ</sup>テワタシノ脳内<sup>ヒタチ</sup>ノタニ追加シテオコ（ボソッ）」

オリマー「それでは、私の下僕<sup>ドクター</sup>観察日誌にでも、余分に書いておきましょうかねえ…（ボソッ）」

ガノン「（愚民があああ…！（怒）余計なことを追加しなくてよいわい…！（汗））」

ガノンがかからかわれている四人組に心中でそう呴いていた時…

ヒュヒヒヒ。

五人組一同「（受信？）」

ガノン達の腰の辺りに付いていた、トランシーバーから受信音が響き渡る。一同は腰に付いているトランシーバーを手に取つて、耳邊りにトランシーバーを翳して同時に通信ボタンを押す。

ファルコン『おーい、お前らー直ぐに四階に来てくれ！生存者発見したぞー。』

リンク「え…生存…者？」

ガノン「なんだと？」

ヨツシー「ヨシ！？？！（なんですってええー？？？！）」

ファルコンの能天気みたいな声を聞いて、リンクは驚いているガノン達を余所に握り絞めているトランシーバーに少々力を込めながら、涙を流した後の掠れた声で通信相手のファルコンに言い返す。

ファルコン『だあかああら、生存者が居たつて！！俺とサムスがイチ『イチャバラ言つなああ！！音速マッチョ男！！！』うぎやあああああ！…』

ゴスッゴスゴス！！！！…と鈍い音が数回トランシーバー越しに新鮮に聞こえた。

五人組は聞こえた鈍い音で、向こうで何が起こったのか直ぐに理解し、額から頬まで冷や汗を流しながら顔が真っ青になる。

サムス『もう！…話戻すけど、エレベーターの中に数人閉じ込めら

れでいるの。』

ガノン「それなら、我らが行かずとも貴様ら一人の力でなんとかなるだろ?』

ファルコン『いててて…ひどい目にあった(涙目)簡単なことを言つんだなアンタわあ…。(汗)それが、どうもうまくいかなくてね。』

リンク「どうして?』

リンク達が通信相手であるサムスから変わったファルコンに、頭部に?マークを浮かべながら言い返す。

サムス『下手に力で無理矢理こじ開けようとすると、中にいる人達まで影響が出てしまうよ。』

ファルコン『それに中に子供もいるんだ。彼ら俺やサムスでもあやしても、全然泣き止まないんだよ。』

リンク達はトランシーバー越しに静かに耳を傾けると、雜音と混じつて何かが叫ぶ声が聞こえる。リンク達は瞬時に四階で起こっている状況を把握した。

ロボット「カカリマシタ、今すぐ貴方方ノ方へ参リマス!』

サムス『出来るだけ素早く来てほしいわ。こつちも、「酷い有様」を私達の心を抉り取るように味わっているんだもの。』

ゲムオ「ソレモ私達ト同ジ思フ持ツテイマスヨ、サムスサン。マダ

「コレテモ、序盤ニスギナイト思イマス。哀シイ出来事ヲ私達ノ眼テ  
味ワウナンテ、モウコリゴリデスカラ。」

「ファルコン」ああ、もう沢山だぜこんな現状なんぞ……リンク、三階  
にいるゼルダにも同じように連絡しておくれ。』

リンク「ああ、頼む。」

リンクがそう言った後、ファルコンが「おう！」と言った瞬間、ト  
ランシーバー越しに聞こえる雜音が途切れた。四階にいるファルコ  
ン達が通信を切ったのだろう。

リンク「さて、四階に行く……うわっ！？？」

突如、リンクが走ろうとした時、不意にバランスを崩して、床へと  
倒れこむ。リンクは両足に力を込めて立ち上がるが…

リンク「（何でだ？？何故こんな時に俺の脚が立てないんだ！）」

自分の足はなんともないよ付いているのに、足の神経だけが麻  
痺したかのように覚える。

まるで自分自身の足が鋭い刃物で一瞬に切断され、痛みの感覚さえ  
無いような感覚を…

ガノン「どうした小僧！？」

ウォッチ「ドウシマシタ、リンクサン！？？」

リンクの声に気付いたのか、ガノンとウォッシュらが振り向いてリンクの元へと走り寄る。リンクは一瞬頬を赤く染め、長い耳を下へと垂れながら恥ずかしそうに言った。

リンク「ちよ…っと情けないけど、足がすくんで立てないんだ」「立てぬなら、早く我らに言わんか。」「うわあー？？！」

ひょいっ！と、リンクの言葉を言い終わらない内に、ガノンがムスッとした表情でリンクの体を掴む。リンクはひょんとした声をあげて、ガノンはリンクの体を両手で軽く持ち上げる。

見た目の状態からだと「お姫様だ！」である。

ミッシー「ミシミシ。（ガノン）ドロフさん。」

ガノン「わかつるわい夜ツ死威威。」

ミッシー「ミッシー！ミシミシミシシー！（「ミッシー」です！そんな変な漢字に無理矢理変換しなくてもいいですよ…。）」

ガノン「五月蠅いぞ両性爬虫類が。」

ミッシー「がるるるるー。（ボクは男です…ビジネスのピンクの恐竜のよつなオカマじゃないです…。）」

ウォッシュ・オリマー・ロボット「（わざわざ古臭いネタを、こんな状況でつかうなよな…。（シッハリ））」

ネタが古いセリフをヨッシーに向けて吐くガノンドロフに向けて、ウォッチとオリマーとゲムオは心の中で突っ込んだ。

ガノン「ほら小僧。」

リンク「わわわっ！？」

ドスンっ！と、鈍い音が鳴り、ガノンは抱きかかえているリンクを、ヨッシーの背中に付いている鞍に向けて乗せた。

ヨッシー「ヨシヨシヨッシー！（ちょっと、ガノンドロフさん！）荒々しく僕の背中を叩きつけるような、乗せ方しないでください！…つーか、痛かったですよ！…！」

ガノン「無理を言つた両性爬虫類。これでも力を抜いているんだが、上手く制御できぬのだ。」

リンク「（俺の世界で）アイツと戦った時、もつかつての極悪非道とは思えないな…。多分…アイツの本心は…」

ガノンはリンクをヨッシーの背中に乗せた後、背を向けて数歩離れる。リンクはガノンの言葉を聞く度に、彼本来の優しさを中へと閉じ籠めている…否、出したくても出せれない悲しさも感じ取れる。

リンク「（心があつたんだろうな…。）」

ガノン「何ボサツとしてある、さあせと最上階へと逝くぞ。ヤツクを長々と待たせてはらなぬからな……。」

フツ…

ヨツシー「わう！？（わわわっ！？）」

ゲムオ「（字ガ一部違ウガ…（シツロミ））」

一瞬の風がリンク達を横切り、風圧でヨツシー達の体が不安定に揺れる。ヨツシー達は足に力を入れ体制を立て直した後、顔をいたるところに振り回すが、数メートル先にいたガノンの姿がない。

オリマー「あつ…ちよつと…！…待ちたまえガノンドロフ君…！」

ロボット「アンナトロロマテ…全ク…。」

呆れながらの声が出る中、オリマーとロボットの顔が逆の位置に向けている。ヨツシーとゲムオはその方向に合わせて顔を向けると、ガノンの姿は二階の渡り廊下に立っていた。

どうやら大ジャンプで二階の渡り廊下まで跳躍したらしい。

リンク「ヨツシーいいのか？…俺これでも…」

ヨツシー「ヨシヨシ（大丈夫ですよ。ボクはマリオさんの赤ちゃんの頃から、ずっと背中に乗せていてますので、心配は要りませんよ。それに…）」

リンク「ん？」

ヨッシーの顔が背中に乗せているリンクに向けて振り返り、微笑みが満ちた表情でリンクに向けて言った。

ヨッシー「ヨッシー。（ボクも仲間の一人として、一人一大切に守りたいんです。悲しみも全て受け入れて、それから……）」

ゲムオ「元凶ニ命トハドレホド大切ナ存在カヲ、私達ナリデ教ヤルダケデス。」

オリマー「そうそう。それだけだなく、私達の斑「リーダー（リンク）」を私達はどこに向かって、状況に応じて気遣つていてることをお忘れないよつに。」

リンク「みんな……。」

ロボット「リーダー」トモイエドモ、貴方ハ私達ト同ジ「二ングン」デスカラネ。「人間ノ特權デアル感情ノ存在ガアル限り、人ハ最モ軟弱デ、心モ体モ脆ク壊シ安イ貧弱ナモノダ。」ト、ドッカノ誰力サンガ言ツテイマシタガ……」

ボフンツと、ロボットの足元に付いていたロケットエンジンに火が点火して、リンク達に聞こえないぐらい小さく咳きながら、数メートル空中に浮かび上昇していく。

そしてリンクを乗せたヨッシー、ゲムオも崩れた壁が盛り上がったところを使いながらジャンプして飛翔し、オリマーは背後にボサツと立っていた下僕達に命令を「えながら上へと昇つていぐ。

ロボット「（…ソンナノハ、勝手一決ツケタモノニシカ見エナイ。  
…私ハ全テノ命ヲ使ツテモ…絶対一否定シ続ケマス！…ソウデシヨ  
ウ…）」

ネスサン…。

ロボットの脳裏に映つた仲間の一人…子供軍団筆頭スマッシュ・ショナル・レンジャー「ネス」の、普段の日常で出している笑顔を思い浮かべながら、心の中でそつと咳きながら後をつけてくるロッキー達を率いて、四階へと目指していつた。

…現実世界 英の国 中央都市RIZ病院内 1階…

グシャツ。

ワリオ達が居なくなつたナースステーションの中に、複数の原型をとどめていない死体達を踏み立つ、全身に由いロープが掛けた長身の人間…

否、ロープの下から人には無い物…長い紫の尾が出ていた。

? 「愚かな…貴様らが求める「希望の光」など、とっくに私が奪い去つたと言つのに…」

無駄に時間を削つてまで、貪るように探すつもりなのか??

バチッ！

生きているパソコンの前を白い手で差し出した時、パソコンの本体全体に青白い電流が、竜が狂ったように暴れていくように走る。

? 「今にやう思つてゐるがいい。お前たちが持つその希望が……。」

本当の绝望へと変えてやう。

その後、液晶画面がグニャリと捻じ曲げられたように不気味にうねり始め、画面中心部分に途切れかけたメッセージアイコンが出てきた。

パソコン画面「Addition al program ”: virus” is cuted . There is a possibility that the main body is destroyed when this program is executed . (追加プログラム「イルス」を実行します。このプログラムを実行……本体そのものが……それる可能性があります。)」

さらに、メッセージが続きその下あたりにメーターのような物が現れ、メーターの枠に青いアイコンが一つ付く。

パソコン画面「”:russ” is transmitted to the controller . This program cannot el the interron .(「イルス」を制御へ送信し……なお、このプログラムは中断キヤセル出来せん。)」

ピシッ！ シュウウウ

急激のプログラムで熱を追い出す処理が追いつかなくなり、熱を追い出す穴からモクモク煙が出始め、画面に張つてあるガラスに鱗が走る。

パソコン画面「The transmission comp  
... on will be done in ... hours.  
Please wait for a ... every muc  
h. ... It repeats. This pr... m (... 時  
間 ... 後に送 ... 完し ... す。大分 ... らくお待ち ... さい。 ... 繰  
り返します。このプログ ... )」

ブツッ！ ボウッ！

遂にパソコン本体がイカれて、煙がところどころ噴き出ながら画面  
がブラックアウトになり、火が画面のガラスを突き破つて中のノー  
ド等がむき出しになりながら噴き出る。

パチッパチチ...

床に散乱していたカルテ等の紙に火が付いて、ゆっくりと焦がしな  
がら燃え広がる。

? 「時間が来た ... そろそろ名乗り出よ!」

我が弟子に ...

ブツッつと、回線が切れたような音が鳴り白いロープを覆つた者は、  
もうすでにナースステーションから消えていた。

to  
be  
con-  
ti-  
nu-  
es  
.  
.

あの人をよつやく出しましたが、終盤しか出せれませんでした…。  
(謝罪)

次回からはネスさんと、マルスとあの人を大量に出す…つもりです。  
更新は同じように遅めです。しばらくお待ちください。

ようやく更新完了。（汗）

ちょっとホラーな表現と残酷描写があります。

閲覧ご注意ください。

## Scenes 5 Rain of sorrow that falls in

空から墜ちる悲哀の雨

そんな中一人の少年は尊敬する者を疑い

心の底に溜まっていた本音を言い放つ。

その者は過去の残像を見ながら…

中に住まつ本来の「己」の姿を見て

静かに笑い、そつと誤魔化す。

：現実世界 英の国 中央都市RZ 南方面 住宅街：

ネス「あいつ！誰かいないのか！？」

リュカ「あつ！…ちょっと、先輩（汗）け…蹴り壊さなくともよかつたんじや（汗）」

ドカッ！

住宅街の一つである民家に、ネスは酷くひしゃげた玄関を蹴り壊して中に入り、リュカもネスの後を追つて、中へと入っていく。

ネス「shit... Even the burglar entered.  
ed. To it...（チツ...強盗でも入られたみたいだぜ。それ…）」

リュカ「Before one is aware, it is  
likely to become "English" th  
at we use why? It doesn't worr  
y. Now...（何故、僕らが使う「異国語」にいつの間にか  
なっているんでしょうね？...それは置いといて、今は...）」

民家の中は外と同じように物置等が散乱しており、ネスは異国語を  
言い漏らしながら廊下を歩く。

ギシギシ

廊下を歩く度に、床の木が腐る手前のような不気味の音を立てる。  
今ネス達がいる住宅街も広く、集団探索だと時間と手間が掛るので  
ネスは分散させ単独探索を取るように指示した。

ソニックとカービィは北のマンション街へ、プリンとピカチュウは  
西側河川敷住宅街へ、トゥンとアイスクライマー（ポポとナナ）は  
東側の段差がある住宅街へと…

そしてリーダーであるネスと弟子のリュカは、南側の割れた大地の  
壁に建てられている地下住宅街のどこにでも見かける一軒の民家の  
中へと堂々と入って、探索している最中である。

リュカもネスに釣られて異国語を吐き、顔を恥ずかしそうに下へ向  
けて一瞬赤く染まった後、リュカの表情は目の前にある到る所に血  
痕が付着したドアを、真剣な表情で見つめる。

ギイイ…

ネスはドアノブに手を掛けて、ゆっくりとリビングらしき部屋へと開ける。

リュカ「お…な…」

リビングの中は大量の血痕と糞が到る所に四散しており、無残な死体のところに複数の鼠が死者の肉と血を啜っていた。

リュカは一瞬だけ顔を歪め鳥肌が身体を過り、声をやや嗄れたように内側から漏らす。

ネス「It is a state as cruel as t  
he outside…（酷え有様だな。外も中も…）」

ネスはリュカとは対象的に冷静な表情で、目を細めながら目の前の惨劇を黒い瞳にじっくりと映す。

完全に原型すら分からないほど破壊された元テレビ、キッチンルームだつた物：

人の体の一部が割れたガラスの欠片達に紛れ込んでいたり、酷く崩れたテーブル・タンスの上やら、所々にばら撒かれていた。

ネス「（これだけ短時間、ここまで手を伸ばすとは…どんな方法でやり遂げたんだ？？）」

ネスは頭を傾げ口元に右手をやや丸め当てながら、脳裏に疑問を思

い浮かべながらリビングを後にす。

リュカ「先輩…あの……、一いつ聞いてもよろしくですか？」

ネス「何だ？」

血で赤く染まつた階段を何んともしない足取りで上つていくネスを見て、リュカはPSエで体を浮遊させ体を覆う薄い緑色の光を零しあけながら、やや齧えた声で質問する。

リュカ「こんな…恐ろしいことにいるのに、どうして平然としていられるんですか？」

バキッ…

ネスが一階のドアのプレートに書いてあつた「ルーク部屋」…子供部屋のドアノブを手を掛けて少し廻した時、ドアノブが脆く壊れて扉が自然に開く。

子供部屋も一階のリビング・外と同じよつこ、血痕と内臓・糞が部屋一杯まで埋め尽くしていた。

ネス「恐れたらまともに捜索できないだろ？集中すらできなくなるそれに、先輩…本当に言つていいんですか？」…リュカ？？

ネスは所々肉体が引き裂かれ、蛆虫がわいた子供の死体を見ながら質問を返したが、途中リュカに言葉を遮られる。

ネス「リュカ、どうしたんだ？」

ネスは眉を細めて何事かの表情を出して、後ろにいるリュカに振り返る。

リュカ「常識的に可笑しいですよ。こんな世界に人間が平然としていられるなんて…ありえない話なんです。正直失礼なことを言いますか、先輩…」

リュカの言動は感情が入っていないかのように酷く冷たく、リュカの表情はロボットのように硬く眉も動いていなかつた。

そしてゆっくりとネスに向けて唇を動かしていった。

リュカ「『普通』じゃないです。」

ビリッ…

ネスの脳裏に青白い電流みたいな物が走り、ネスの意識…否精神体は現実世界から遠ざかり、大きい体から小さい体へと変わつて霧状へとなる。

負の因子が入つた仮想空間へ入つていくと、その霧状は複数の子供達の団いの中へ佇んだ。

子供?「…お前、普通の人間じゃないだろ?人間じゃない奴が何故ここにいる?…」

子供？「ホントホント。なんで化けモンが俺ら人間の世界に存在しているんだよお？？」

脳裏に白と黒のコントラストの世界の中に小さい複数の人影が、中心に佇んでいる小さい人影に向けて口ぐちに言い放つ。

中央にいる子供？「…違う！僕は君達と同じ人間なんだ！化け物なんかじゃない！！」「うるせえ喋るな、地球外生命体が！！」…あつ！…」

中心に佇んでいた子供が必至な言動で囲っている人影に言い放った時、ゴスツッと鈍い音を立てて中心にいた小さい人影が脆く床へと崩れ落ちる。

子供？「クハハハッ！！嘘つくんじやねえよバーカ。クスクス…」

ドツ！

子供？「嘘つきは泥棒の始まりって、僕のママが教えてくれたんだけど…宇宙人にはわからないか。くくく…。」

ドカッ！！

複数の人影が、中央に倒れている人影に向けて笑いながら数回蹴りをかます。

子供？「そうだよなあ、俺らは知能溢れる一・ン・ゲ・ン様なんだもーん。」

ドスッ！

子供？「そ、そ、そ、う、 宇宙人には知能つて、い、う、も、の、す、ら、 ない、ら、し、い  
ね、。アハハ、」

ズンツ！グシツ！..

すると複数の人影が腰のポケットからしき物で隠していた刃物を、中央に倒れ伏す人影の所所に容赦なく突き刺す。

中央にいる子供？「う、あ！..ああ、..あ、う。..ぼ、僕は、..」

中央に倒れ伏す人影の元から赤い物が広がっていく。

だが、到る所に血が流れても中央の人影は苦し紛れの言葉を吐きつつ、立ち上がろうとする

子供？「つけ！可笑しい体だな、『それ』。なんで心臓付いたにさつさと死なないんだよ？？」

子供？「普通脳天刺したら一発なんだけど、『氣色悪いなあおい？？ゾンビみてえ』」

更にせせら笑い声を出し体の色んなところへ刃物が刺さりながらでも、必至に立ち上がろうとする人影に向けてふざけた態度で言い放つ。

中央にいる子供？「ぼ、僕、あ、は、ん、う、あ  
げん、な、んだ、。」

子供？「……じゃあなんなんだよその現象はよお？「そ・れ・は」何なんだ？？」

一人の人影が人指し指を突き出して、中央にいる人影に向ける。

中央にいる子供？「え？……！」

中央にいる人影が付きつけられている方向に、ゆつくりと田線を向けると…

中央にいる子供？「……」これは…

中央に立っている人影が驚愕の声をあげる。

子供？「……人間つていう物すら見当たらねえなあ？お前…出身地は宇宙外だろ？？？」

背中から赤い霧状で生えた、竜のような巨大の両翼…

両眼が澄んだ漆黒の瞳ではなく、深い深海色の浄眼色へと変わっていた。

子供？「怪物だよ怪物。モンスターだ。」

…嘘だ！こんなの！…

カラソツ

体のいたるところに刺さっていた刃物が抜き落ち、乾いた音が一瞬響く。

子供？「まさに地球外生命体だな。ゲームと比べてこんなにリアルに見れるとはねえ」「

グチッ…

…違つよ、僕の腕も…体もこんなんじゃない…なのにどうして…

中央の人影は何度も現実的に起こっていることを拒絶しても、体の所々に赤い光の線が無音に伸びていく。

子供？「全然違わねえよ。もつお前は化け物としてはつきりと証明されたんだ。」

…違う！…僕は…！…

メキッと肉が潰れたような音が鳴る。両足が五本足指ではなく、一瞬に竜族のような黒い三本爪足に変化した…。

…違つ…違つんだ…！…こんなの…

中央の人影は何度も現実逃避しても、伸びた赤い線の体の部分が変異していく。

子供？「否定しねーで自分の体をよく見ひよお。見ている側にして素晴らしいじゃないか。」

…違う…ち…ち…違つ…ち…が…ち…がう…  
…つあ…ああ”…！…

グジュッ…変異されていない体の部分のところにゆづくつと走り、線が無情にして隅までと伸ばす。

子供？「アハハ！立派なモンスターだ！！カメラが無くて残念だつたけど」

…ああ”…“う”ああ”ああ”あ”ああ…“やめ”  
てええ”…“え”…

バキバキ…中の骨が碎かれた音が鳴り、人間の肌が腐り落ちるよう赤く染まつた床へと落ち、筋肉の組織がむき出しになる。

子供？「うはああ、スゲー。スクープにでも出せれるんじゃない？」

…か…りだ…の…が…

子供？「もし出せれたら、俺らスゲー賞金貰えるかもしけんぞ？？」

…と…と…ま…ら…ら…な…  
…いい”…“

中央の人影が顔を上へと上げて痛恨の悲鳴…否

中央の人影「グルオオオオオオオ…！」

中に封印されていた悪意な獣の咆哮をあげる。

ギュ…ギギ…

両腕部分の筋肉の組織が赤黒く硬質化し、刃物で傷が付いた部分が締めあげるような音で塞がる。

グチュ…ベキッ…

両肘から中間指と人差指爪の間に黒い溝ができ、指先の爪が異常ぐらに鋭く伸びて黒く変色する。その瞬間…

ジャキッ…ズンッ…

両溝から骨で出来た折り畳みブレードらしきものが現れ、中央の人影は腕を振るつて周りを囲っていた人影を一瞬の内に横へ引き裂く。

子供？「アハハ！出たねえ…アンタの本性が…」

子供？「ウハハア 衝撃的映像だよコレ 」

体が横へと両断されたのにも関わらず、人影達はクスクスと笑いながら床へと落ちていく。

子供？「これで君は、完全な怪物として証明できたんだ。クスッ 」

カシッと、溝から出ていたブレードを刃物の音を静かに音を立てて仕舞い込む。

子供？「くくく…その姿、お似合いぜ？人間の姿よりも素晴らしいよ

」

異形と化した中央の人影？「…。」

頭部から生えた竜みたいな二つの角、淨眼の目もとから伸びる赤い線の光が不気味に光る。

中央の異形と化した人影らしき者は、いまだに笑い続いている生首達をP.S.Iで浮かせて首元まで上げる。

子供？「宇宙人の本来の姿だー！カッコイイーぞ！」

……れ。  
……

異形と化した中央の人影の姿が、最初は白と黒で分からぬ色から、段々と現実世界と同じように色が付いて明らかになっていく。

子供？「パパとママに報告したかつたけど、足がなくちゃしょうがないよなーー！」

子供？「まあ これだけ言つておくか。アンタは……」

悪魔だ。

角が生えた短い黒髪に黒赤の肌、瞳は深海色の淨眼で、怪物の体と化した到る処に伸びている赤い線……。

それは幼い頃の自分……ネスのあの出来事のキッカケで……

人の体では無くなってしまったのだから……

悪魔だ。 悪魔だ。 悪魔だ。 悪魔だ。 悪魔だ。

惡魔

顔を歪めて体がだらけるような体制になる。脳裏に何度も聞きたくない三文字が、何度も繰り返しにヒューーし心の底で沸々と湧き上がる恐ろしい物が上がって来る。

悪魔化したネスの体の所々にヒビが入り、体を包み込むように両腕を巻く。

段々とヒビ割れた所から、不気味な赤い光が差し込んでくる。

悪魔化ネス「…黙れえええええ！」

グシャツアアアアアアー！！

ついに限界点を超え、ダイナマイトでも爆発したように世界が一瞬の内で赤く染まる。

ブチッグチャ…ブチュジユル…ジユ…グチュ…

飛び散る赤い鮮血、人の腕と破れた肝…

悪魔は瞬時に口を開き、鋭い牙で人の頭を骨を肉を噛み砕き、口に入っていた臓物を吹き捨てる。

それでも飽き足らず刃を振りかざし、肉を引き裂いて思いのままに解体する。

もはや自分との意識とは関係なく、無差別に赤い花を咲かせ…本能のまま人の体を壊し…

そして最初から繰り返していく…。

全身が赤く染まるまで、悪魔は無差別に殺りつくしていった。

オオオオオ…

悪魔化ネス「…僕は……『俺は……人間なんだ』よ。』…「『決して…化け物じゃないと言っているのに…』じゃねえと言っているのになあ…』

どこからと不死者のような声のような風が吹き、血のような世界になつた血の池中心に立つ悪魔。

少年と大人の声が交互に混ざりながら右手に握りしめている小さな人の腕を見つめながら言ひ。

悪魔化ネス「僕は…『俺は…』」

バシャッ…

持つていた酷く千切れた小さな腕を投げ捨て、血で真赤に染まった顔を上にあげてそつと呟いた。

リュカ「前からずつと思っていたんです。あの時先輩は右腕が失つて大量の血を吐き出しても平然としていた…この時点で可笑しいん

ですよ……まるで『死』そのものすら恐れていないうつ……

ネス「…。」

リュカは顔を歪めながら下に向け、両手を強く握り締めてありのままに思つたことを、真剣に聞いているネスに向けて言い放つ。

リュカ「これは貴方と僕の戦闘経験とは関係ないんですよ……確かに先輩は僕よりかは長い経験と知識を持っているのは分かります！しかし、それとは別に…」

涙で歪んだ顔をあげて今だに戸惑うネスに向けて、目の前まで歩み寄つた後本音をぶつけた。

リュカ「人間性の一つである『死の恐怖』が、全く無いのはどうしてですか！？」

ネス「…。」

ギリツ：

リュカの両手がネスの胸ぐらをきつく握り締め上げ、数回ネスの胸に向けて丸めた両拳で殴りつける。

そのあと涙でグシャグシャになつた顔を、ネスの胸元へ横方向に数回擦る。

リュカ「普通は死の恐怖が恐ろしくて、誰もが生へと必至で足搔く

んです！なのに貴方は足搔こうとしない…生への固執が全く見当たらないんだ…！これではこれでもう既に可笑しいんです！！！」

ネスは少し眉を細め静かにリュカの本音を最後まで聞き届ける。

リュカ「まるで貴方そのものが人であつても人ではないように、僕の世界にいた「キマイラ」のような雰囲気が漂わせるんですね…」  
なのに、どうして…」

キマイラ…それは生きている者又は死した者の体に機械マシンを組み込み、植え付けた親の意のままに動く戦闘兵器。

かつてリュカの世界で、兄であるクラウスもキマイラ化されて自我を無くし、主である「キング♪」であること、「ポーキー」に意のままに操られた。

世界を賭ける戦いの果てにクラウスは、戦いのさなか母とリュカの声を聞いてかつての自分を思い出し、自ら犯した罪を償うため自身に雷を放ち息絶えた。

リュカは自らの半身である「クラウス」と最愛の母を失い、針を抜いてからの平和になつた世界で、彼はずっと仲間達に支えられながらでも、心は何もない闇で孤独のままに生きていたのだ。

リュカは大量の涙で両眼が赤くなり充血になりながら、ゆっくりとネスに向けて顔をあげると…

リュカ「どう…して…貴方は…そんな素顔をして…いる…ので…すか？」

まるで僕の…かあさんのように

リュカの本音の中に嫌惡なる語が入っていたのに関らず、ネスは少し微笑んだ表情で一瞬瞼を閉じた後、数回リュカの金髪を軽く右手で撫でる。

ネスの表情を見る度に、何度も亡くなる前の母の笑顔が重なつてリュカの瞳に映る。

ネス「前から、リュカと同じよつに言つた奴がいてな…そいつは天才少年のくせに泣き虫でね。何度も何度も地球を救う冒険中に言われたよ。「お前可笑しいじゃないか！」ってな。」

リュカ「…先輩？」

そう言つた後ネスは、リュカを母親のように両手と両腕で抱きしめたまま、顔を無残に割れた窓へと視線を向ける。

ザ……ザザ…

外はいつの間にか雨が雪のよつに降つていた。まるで切なさが伝わつてきているように…

ネス「長い冒険の末に、俺は過去の出来事を鮮明に思い出したのさ。優しさも…両親からの祈りも…それだけじゃなく…」

n the large crime that I committed in the past it is not possible to expiate this ahead.

リュカ「!?(え…何なの…コレ!?)」

突然聞いたことがない異国語をネスが言つて、リュカの体を掴んでいた両手をそつと放す。

リュカは両眼を大きく開きやや驚いた表情を出しながら、窓際に移動するネスを見続ける。

ネス「The tohubohu that people of the real world invented all attaches, and is effective in the body that much, too. ...」

リュカ「(え…なんて言つているの!?(え…発音が古すぎて僕には…))」

リュカの脳裏内でネスの言語を和訳しようと必死で悩んでいた時、ネス「要するに、仲間達でも決して云えない絶対の秘密があるってことだ。要はお前にはまだ早すぎるんだよ。」

「ス。……は、……たを……。」

リュカ「(あれ?いつの間に…)えつ!?(あ…そうですか…。」

「

突如通常語に戻っていることに「はつー？」と言ひて気が付き、やや笑みを浮かべているネスの表情を見る。

ネス「それよりも、まずは市民の生存確認が先だ。今はマリオが言ったとおりに救助活動をしなきゃいけねえだろ？？」

リュカ「あつ！… そうでしたね。じゃあ先ほど僕が言つたことは…忘れてください。今僕たちがやるべきことを優先にしていかないといけないし…。」

リュカがそう言つた後、ネスは「ああ。」と言つて割れた硝子をくぐつて、軽い跳躍で隣家の硝子が割っていた一階部屋へと移動する。リュカ「（なんだらかの）感覚、先輩の背中を見る度になんだか泣きそうになる… 少し…だけ先輩の心の中から感じたけど…。」

リュカはP.S.Iで体を浮遊させ白い発光を出しながらネスの後を追い、ネスの背中を見るたびに切なさと悲哀が溢れ…

少女のような声も、リュカの心のチカラを通して聞こえてくる。

……幼い少女のような声が、聞こえた気がします…。

……

… 同時刻 現実世界 英の国 中央都市RN 西方面 地下駅ステーション…

? 「メタナイト殿、そちらはどうですか??」

メタナイト『いや、特に変わったところは無い。何処から見ても死体だけだ。』

一方変わつて西側の漆黒に満ちた地下一階駅「Y字分岐点」にて一人探索している、蒼穹のマントと鎧と髪をもち腰に神剣携えた青年剣士「マルス」が、右耳にトランシーバーを当てて地下一階の通路にいるメタナイトに連絡を取り合つていた。

マルス「そうですか…また何か変わつたところがあつたらまた連絡をお願いします。」

メタナイト『うむ…今雨が降り始めたところだ。手早くやらないと何処かに生きている生存者の体力が持たん。』

トランシーバー越しに聞こえる僅かな雨音。雨が降り始めるとなると温度が下がり始め、生存者の体温を徐々に奪つていくのだ。

たとえ雨が入らない地下にいるといえども、電気系統がやられて温度調節機能も停止しているので、徐々に地下の排気管を通して冷え込んでいつてしまう。

マルス「ええ。じつらも冷え切らない内に見つかればいいのですが

…』

メタナイト『ああ…。』

ブツツと音が鳴つて相手先の通信が切れたことをマルスは確認した後、節電状態モードに切り替え腰にトランシーバーを元あつたところへと戻す。

マルス「（段々と疊り行きへとなつてきたな…それに今いる場所は地下一階……）」

オオオ…

目線の先にある漆黒に満ちた線路状から、不死者のような風音が聞こえてくる。線路上には死体はないのだが死臭が何処どころもなく漂つてくる。

マルス「（此処が完全に冷え込むまでの時間が掛からない。そうだとしたら約4～5分程度が生存者を助け出すタイムリミット…急がなくては…）」

? 「おーい！マルスうーー！」

突如気が抜いたような声が響き渡り、マルスは声がした方向へと顔を向ける。

マルス「ロイ、あの…ねもつと空氣を読「えつ？？何て言つたんだよマルス。真剣に悩むと折角のイケメン顔がブサイク顔になるぜー？」…（怒）」「

赤い髪に青い戦装束…暗闇の線路上から一いつ朶ぱへと駆け寄つて来る声の正体はロイであつた。

マルスはややムスッと頬を膨らませ、額にプッチンマークでも付いているかのように状況を読んでいない能天氣の剣士に顔を向ける。

マルス「はあ……君は能天氣すぎてこの状況をどう思つているんだか……ヤレヤレ（ボソッ）」

アイク「おいマルス……フォックス達が「分岐点のところまで来てくれる」と言つてこるが。」

その後に続いて、無表情のアイクも奥の暗闇から歩いてきた。

マルス「……生存者がいたのか……？」

アイク「うむ、……なんだか「れつしゃ」の「どあ」が開かないんだとか……」

マルス「……フォックス達が持つている近未来的兵器とかで開けられるはずじゃあ……」

ロイ「それがなあ、中に複数の子供と女がいるんだって。へたに武器で破壊しようとすると、中にいるやつらが怪我をしてしまうんだとか。」

マルスはアイクとロイに導かれながら暗闇の線路上を歩く。少し否数分歩いて行くと緩いコーナーリングの辺りにジグザグに脱線している列車が見えた。

「ひどいね……」とマルスが小声で漏らし最後尾辺りを見ると、非常用ドアを開くための作業をしているフォックス、ファルコ、ウルフ、スネークがいた。

フォックス「おつ…丁度いい所で来たなマルス。今最終調整に入っているところなんだ。」

フォックスがマルスにそう言つた後、ドアの開閉作業をしていたファルコが「ちょっとやってみる。」と言つて、隣にいたスネークが無言で頷き静かに何かしらの機械をドアに取り付けて操作する。

マルス「そうか。それで中にいる生存者の状況を…」

ウルフ「遅えぞナルシスト小僧。まあそれは置いといて、コイツ（列車開閉機能）のせいかどうかわからんが、旧式なんで作業が思つた以上に難航なんだよ。それに中にいる餓鬼共が全然泣き止まなくつてな、どうすればいいかと思つていたんだが…」

ウルフが状況をマルスに話していた時、スネークの細かい手作業でガシュツと音が立ち、緊急ドアが開いたかと思つたのだが…

ファルコ「ちつ…あれほど作業したのにこんだけか。」

スネーク「駄目か……思った通りに機能<sup>コイツ</sup>が旧式すぎて最新版でもこれが…。」

やはり旧式の機械のせいいか、スネークは両手を拡げてお手上げのような仕草を取る。

よく見ると開いた間隔は、細いワイヤーを入れる程度の僅か5センチ程度しかなかつた。

マルス「ファルコ、スネークさん…これだけしか開きませんか??」

ファルコ「見ての通りだ。これが限界だぜ。」

フォックス「この列車は八車両のようだけど、七車両以降からサン  
ドイツのように潰れているんだ…生存は無と言つてもおかしくな  
い…。」

フォックスが言つた通りに七車両以降先を見ると、車両が次々と押  
しつぶされたように原型さえ分からぬぐらいで大破していた。

マルスは眉を細め額に皺を作りながら、かろうじて原型が残つてい  
る八車両の酷く抜けた窓の中の様子を見る。

マルス「（中は）倒し状態か…それに中の空氣も相当薄くなっ  
ているハズ。だとしたらこれしかない…。」

かろうじて生きていた人間が列車の横転により、所々呻き声をたて  
ながらまさにドミノ倒し如く折り重なるように倒れていた。

空氣の出口は先ほど数センチ開いたドアでなんとか酸素は入るもの  
の、やはり一時的なもので手早く開けなければ生存者の体力・息が  
長くは持たない。

いつも状況を打破するために、マルスは一瞬のうちに思いつき取  
るべきことは一つだけだった。

マルス「手段は…これしかないか。」

ウルフ「つけ、やつぱりそう来るのは思つていたがな…鍛えれば  
よかつた（握力を）」

ロイ「へへっ、大分（？）トレーディングで握力を鍛えたから成果を出すチャンスだぜコレ」

アイク「ふんっ！（鼻息を出しながら）」

ギギギギ…

マルス達は僅かに開いたドアのところに手先を入れて、開く方向へと持てる力で強引に引っ張つて開けていた。

ファルコ「おい、蛇のおっさん……ちゃんと力入れてんのか！？」

スネークの隣にいたファルコが、やや苛立つた言動で必死で引っ張つているスネークに言い放つ。

スネーク「これでも全力で引っ張つているんだが（怒）」

額にブツチンマークでも付いたかのように、寡黙ながらの持ち前の冷静の言動でファルコへ言い返す。

マルス「（もう少しで…）」

フォックス「皆…もうちょいだ。このままで…」

ギギ…

少しずつだが、徐々にドアが数センチづつ開いてきた。数センチ開いていく度にマルス達の瞳に希望の光が映る。

… 同時刻 現実世界 英の国 中央都市RN 北方面 高層ビル通り

マリオ「ううしゃーこれで止血完了…後は患者をできる限り動かさないようにして…安全に看病できる場所はつと…」

ディディ「あつ…それならマリオが僕らに連絡する前に見つけた「あの」場所にしようよ…そこなら広そうだし。」

デンキー「ウホホホッ…（あー、せつを見つけた丸い形の建物（公民館）か。中は確か荒らされてなによつた気が…）」

マリオ「賛成だな。じゃあ仲間達全員集合できる場所として…連絡を取りつ…それとトリップゲートの位置を設定しないとな…！」

… 同時刻 現実世界 英の国 中央都市RN 病院内 地下1階 手術室前…

ルイージ「もう少しで開きますからね。少し辛抱してください!」

クッパ「ワリオ…早よ開けんか…!（ベシピン姉さんだと信じて興奮中）」

ワリオ「うるせえな、うつ急かすなよ愚黒。あと30秒で解除できるから。（キーボードを高速で打ち込んでいる最中）」

… 同時刻 現実世界 英の国 中央都市RN 東方面 ショッピングモール内部 4階 エレベーター前…

ガノン・ファルコン「むぎわぎわぎわぎわぎ（エレベーターのドアをこ

じ開けている最中）「

オリマー「A + B B ! ! 次はC + C B Z + Z + R L ! !」（下僕達に指示中）」<sup>ピクミン</sup>

ゲムオ「ガノンサン、ファルコンサン、マダロ・05センチヅツシカ開イティマゼンヨ。」

ロボット「アトロ・5パーセント腕力ニカラ入レテクダサイ。私ノ計算ガ正シケレバ後数分デ開クハズデス…。」

ガノン・ファルコン「〇・5つてどんな力だよ。」心の中で突っ込み

リンク・ヨッシー「（それよりも、オリマーさんの言動が…カオスすぎでます。）」

：同時刻 現実世界 英の国 中央都市RZ 南方面 住宅街：

ネス「今度はあそこへ行つてみるか。リュカ、着いて来い…。」

リュカ「あつ…はい、先輩…！」

しかし…不吉なる「ナニカ」で、ようやく掴んだ光が一瞬の内に…

引き裂かれる絶望の闇へと、変わっていくのを…

マルス達だけでなく、東西南北にいる戦士達は知らなかつた…。

to  
be  
con-  
tin-  
ues  
.

残酷描写があります。注意して閲覧してください。  
なお今回は戦闘メインかつマルス達が活躍します。

Scene 6 The apostle of the purgatory

地獄の淵から這い上がりしモノ…

そのモノの名は「煉獄の喰人」

そのモノは一つの情報を支えて生きていふ…。

その一つの情報は生きるための糧…

樂園の者を全て

「喰らひに渴くせ」ことだけだった。

…同時刻 現実世界 英の国 中央都市RN 西方面 地下駅ステーション西道…

カサカサ…。

ウルフ「あん?」

マルス「…？？何だ？」

あと数センチで横入りが出来そつぐらいなドアが開く寸前に、「小さき何かが蠢く」音が聞こえてきて、自然にと引っ張る手が止まる。

マルス「（何の音だ……？それに段々と……）」

ウルフ「（俺様達に向けて……近づいて来る……ぜ？？）」

いち早く音に気付いたウルフとマルスは、音がした方向へと顔を向ける。

フォックス「なあ……何か聞こえなかつたか？？」

ファルコ「ああん？？ 気のせいじゃないか？？」

カサカサ……。

ファルコ「……！」

スネーク「……。」

またもや「何かが蠢く」音が聞こえてきて、ファルコは冗談めいた表情から真剣な表情へと変わる。

方向先は七車両以降……しかも段々とこちらに向かつて「何かが蠢く」音が大きくなるのだ。

チヤ……

自然にマルス達の手が、左腰・背中等に掛けられている武器を抜かないまま握る。どこから見ても臨整体制だ。

ロイ「（なあ……メタナイト殿に連絡した方がいいんじゃないかな？？）

「

アイク「（俺もさう思っていたのだが…どいつも）」

ロイが小声で臨整体制を取つてゐるアイクに声をかけるが…

スネーク「現実的にはうまくいかないものだ…」

思つように体が動かない…といつべきか、簡単にできるはずの行動が全身でも凍りついたように、脳に送られる命令情報が遮られるよう拒絶する。

長年の戦闘経験、身体の機能とは関係なく、それよりも別な仮想世界にない現実世界の「モノ」…

見たことも、感じたこともない…「アレ」に恐怖していたかもしない。

グシャツ…！

一同「…？」

背後から何かが潰れた音が鳴り、マルス達は背後へと体を向けた途端…

? 「ギ…………ギギ…」

マルス「なつ…？」

ロイ「はあー？ なんだありやー？ む…虫…？」

横転した列車の屋根に佇む物…普通はミクロサイズで見えない生物が「何か」で異常発達したかのように赤黒く変色し巨大化していた。

チ…チウジュ…ジユ…

マルス「（何の音だ？）」

スネーク「（何だか嫌な予感が俺の脳裏に過るんだが…）」

だがそのノミは、背を向けており何かを食っている最中で、しきりには気づいてはいないうだ。

ウルフ「ああー…蟲があんなにテカイのは見たことないぞー？」

ファルフ「常識を覚えやがれ！ って言いたいところだが…」

ウルフが常識さえ外れた言動に反応するかのように、列車の屋根にいたノミがゆっくりとマルス達に振り向く。

一同「つー」

マルス達は振り向いたノミを見て、顔が蒼白になるほど唖然とした。

ノミの口にぶら下がる細長い物と、滴り落ちる液体…

無残な姿で骨を碎かれ、肉を喰い千切られ、原型すらとどめていない人間の死体を口の中に頬張っていたのだから…

巨大化したノミ「ゴクッ…」

血と肉と肝を十分歯で啜つた後、口元に残っていた千切れた腕を飲み込み満足したような感じで腹の中へと押し込む。

ジユルッ…

巨大化したノミの瞳に、今だに硬直しているマルス達の姿が映る。巨大化したノミは口の中に漂う血が混じつた唾液を舌で舐めまわすよに、静かに音を立てた。

おやりく「ヤシ」の脳内に響き渡る命令情報はたつた一つ…

マルス「今度の餌は…」

フォックス「ああ… まちがいなく、」

僕・俺らだ。

ボコッ！

マルス達は瞬時に今いた場所から散らばった時、列車の屋根にいた巨大ノミが全身を丸めて突進してきた。

先ほどの場所から滑るように数メートル離れていたマルスが、ノミが突進してきた箇所を見ると鉄で出来た線路が柔らかくなつたよう

に凹み、更にコンクリートまで陥没していた。

マルス「（一度でもアレを受けたら終わるな…だが敵は一匹。）」

ファルコ「ただか体がデケュだけじゃ、俺らを捕まえられないだろ？射撃の的にさせてもら…あ”！…？”

マルス「どうしたファルコ…？」

ファルコがブラスターを巨大ノミに構え余裕を言い放つた時、突然ファルコの余裕の表情から何かに青ざめた表情へと変わる。

マルスはファルコに釣られて、ファルコが見ている方向へと顔を向けると…

?「ギチギチ…チ…。」

ロイ「うわああ…？…！… 蝋虫…！…！」

アイク「それにしても大きいぞ…」

ゾゾゾ…

潰れた七車両の隙間から出でてくる白い物…肉眼でも見れるぐらに大きい「蝋虫」が複数現われる。

そこからだけでなく、排気管や排水管から異常発達した虫現れ、百足や蠍螂等が出てくる。

スネーク「…包囲されたな。」

マルス「… そうだね。」

虫軍団「ギギギギ… ギシ…。」

スネークが言つた通りマルス達は、異常発達した大量の虫軍団に包围されていた。

虫共の口元から滴り落ちる新鮮な肉を今すぐでも喰らいたい衝動を出す透明の液、生きた者を裂いた時に血が付いた爪・鎌を軽くコンクリートを引っ搔く音を立てる。

マルス達は音を立てないよひこむつくりと後退し、互いの背中を付け円形陣を取りながらそれぞれの武器を構える。

ウルフ「ちつ、見るからにして氣色悪い奴らだな。数だけで俺様達を叩き潰せるとでも？？」

フォックス「ん？ やけに自信満々じゃないかウルフ。余程自慢ができる程の新しい業<sup>ワザ</sup>が出来たとでも？？」

フォックスはウルフと背中合わせになりながら背後で銃を片手で投げ廻し、自信満々の表情を出すウルフを見て顔を後ろに向き目線だけで問い合わせる。

ウルフ「毎日就寝前に隠れトレーニングやつててな… よひやく」ある技「の弱点を克服し、100パーセント完成した業なんだ。今度こそ貴様をブチのめすためによお！？」

フォックス「そう…。（俺の周りにいるライバルが段々と強くなつ

てきているな。（汗）じゃあ俺もアンタに負けないように頑張らないと。」

ファルコ「…援護はしておく。できる限り無茶すんじゃねえぞフォックス。（「イツも強くなつてきてんだよな。まあこじで張り合つつもりはないけど…。）」

カチンッ

ウルフの新技を期待しつつフォックスは、右手に持っている銃に左手でマガジン部分を引っ張つて装填確認する。

ファルコもフォックスと同じように装填確認した後、ゆっくりと向かってくる敵に向けて銃口を構える。

スネーク「戦況を有利にするためにトラップを作る必要があるな。だからマルスよ…」

チャツ：

スネークはマルスの左腰に付いている神剣ファルシオンの鞘を見ると、閉まっている鯉口部分から少しばかりの光が漏れていた。

マルス「わかつていてる。僕らが奴らと闘つている隙に、スネーク君は得意分野を有効利用して脱出用の突破口を作る。そして…」

ザン！と、アイクの背中に携えていた大剣ラグネルの柄を掴んで、片腕だけで一刀両断したように剣を振り下ろしながら出し、空を切るような音を立てる。

アイク「速やかに生存者を救い、ここから離脱する…その後は、」

ボウンツ。

ロイの右腰に携えていた神剣の鯉口から紅蓮の炎が、本人の情に反応するように激しく燃え上がる。

ロイは左手で剣の柄を軽く握りしめ腰を落とし、段々と覆い尽くすように群がつていぐ虫共に向けて構える。

ロイ「マリオがいる『公民館』オジジナルワールド今まで生存者ら含めて全員『想像世界』へと退避つてどこかな?」

マルス「そういうこと。やつと君も一国の軍師らしく考えるよくなつたね。(皮肉)」本人は悪気なく言つたつもり

ロイ「なつた…って、お前…俺のことをなんだと思つていたんだよ(怒)単純な熱血馬鹿だと思つていたのかあ!?!?(怒)」ブチギレ5秒前

冷静な表情で皮肉めいた言動を言いながら、群がる敵に向けて臨制から戦闘体制を取ったマルスを見て、ロイは頭部にプツチンマークと、蒸氣らしき物を出し表情は般若の形相を作りながらマルスに振り向く。

ファルコ「喧嘩なら他所でやれやナルシスト王子と赤毛馬鹿。それよつも…」

アイク「…来るぞー!」

ドカツ！ドフツ！！

アイクが言った直後に囲んでいた虫達が、一瞬の内にしてマルス達がいる所へと雪崩れ込むように襲いかかる。

異常発達した蠍螂の鎌や顎に付いた鋏が、コンクリートを深く削つてマルス達の肉を内臓を引き裂き、赤い噴水を咲かす。

そして地を這いまわっている蛆虫が血を一瞬の内に吸い取り、分割された肉と飛び出した内臓は残りの虫共が喰らい尽くす。

虫達は当然のように食り喰うことができると、誰もが考えられただろう。相手が「ただの人間」ならば、

しかし…

マルス「…遅いよ。」

巨大化した蠍螂「ー？」

ザクッ。

仕留めたと思った蠍螂の顔面に、左目から右顎まで刀身が食い込む。  
そして…

バシャアアアアア！－－－！

一瞬の内に蠍螂の顔面…否体ごと両断されて、断末魔さえあげられ

なこまま中身の臓器が勢いよく噴き出す。

紫の液体がスローモーションのように飛び散りながら、蠍の下半身からマルスが現れた。

どうやらマルスは巨大化した蠍の懷に飛び込んで最初の一撃を逃れつつ、弱点部分とされる所へとファルシオンの刀身を食い込んで、そのまま反撃したようだつた。

マルス「相手が『普通の人間』だったら殺れたと思うよ。普通ならね…。」

紫の液体がマルスの全身を逸らすように飛び散る。マルスは一体田を殺つた蠍の死骸を見ずに、そのままには次なる標的へと変える。

囲っていた虫共「ギギ…シャアアアア…！」

囲っていた虫達がマルスによって斬り斃された仲間の蠍の死体を見て、死に物狂いのよくな勢いでマルスに飛びかかるが…

マルス「つたへ、もう…だから…」

囲っていた虫共「ギイッ！…」

ゴシ…

包囲の中心にいたマルスの姿がいつのまにか消えており、虫達は法則状目の前にいた仲間の虫の頭部へとぶつかる。

見えないスピードで飛びかかる虫達の猛攻を、風のように舞いながら全て避けて、マルスの体は自分を囲っていた虫達から数メートル離れていた。

マルス「数で畳み掛ける君達では、こんな小さい僕を捕まえられないらしいね。それで僕を倒すことが出来るのかい？？」

囲っていた虫共「！？！？」

ズルツ…

突然虫達の手足に小さい線が走る。その線が段々と広がっていき肉が斜めへとずれしていく。

マルス「僅かな時間さえあれば、僕は一方的に攻撃できるけど…まあ、相手が悪かつたと言つておくとするか。」

ブシャアアアアアツ！！

一瞬の内に虫達の手足だけでなく全身が細かく分解され、大量の紫の液体が舞い散る桜のように咲かせる。

絶命すらあげられないまま床に溜まっていた自らの紫の液へと、細切れになつた肉片がスローモーションのように落ちていく。

アイク「ふんつ！！」

ロイ「いいいやあああ！！！」

ボウンツ！！

虫共、「ギイイイイイイイ！……！」

炎を宿した神剣「ラグネル」・「封印の剣」の刀身を、思いつきり一刀両断ごとくコンクリートに向けて振り下ろす。

剣ごとコンクリートへ突き刺した時凄まじい熱気と爆炎が生まれ、コンクリートの中についた鉄ごと溶けだし液体へと変わり果てる。その中から百熱の炎が生まれ本人の意思があるように、自分達を喰らおうとする周りの虫達だけ焼き尽くしていく。

ジユウウウ…

虫達の肉がズルリと焼け落ち、中の内臓までも全て焦げたよつな匂いがマルス達に襲いかかる。

マルス「ちょっと…火加減してくれないかい？こんな悪臭を僕の身に付けたくないんだけど。」

ロイ「へへへ、わりいわりい！ついつい力入れちゃって！…まあアントの場合は、虫肉の香水でもかまわないじゃないの？？」

マルス「…なるほど、君は僕に斬り斃されたいようだねえそれ。（怒）」

マルスは二カつと少年のように笑うロイを見て、先ほど仕留めた後鞘に収めたファルシオンの鯉口を切つて表情は般若の形相のまま睨みつける。

ロイに対するマルスの怒りを面白にアイクは、真剣な表情のまま

で焼き肉へした虫共の死体を見つめる。

アイク「…加減はできん。俺は最初から本氣で殺るつもりだ。（拍否）…腹減ってきたので虫の焼き肉を喰いたい。（ボソッ）」

フォックス「え…？…なんか…物凄いことを聞いけやつたけど（汗）…まあ気にしなこた。」

フォックスがアイクの言動に少しシッコリながらでも、田の前に立ちふさがる虫達に向けて突進する。

虫共「ギシャアアアア…！」

フォックス「おいおい、一か所に固まらないで四方へと避けたほうがいいぞ。まっそんなことを言つても…」

フォックスが半分呆れた表情で言いながら、群がる虫達の中へ突撃する。

目の前に覆いぬくすぐらこの虫達が牙を出し、普通なりフォックスの肉を食い込んで引き千切る感触を味わいながら食らへぬべすべのだが…

虫共「！？？？！！」

目の前にいた獲物の姿が無く、標的は虫共の数メートル後方に立っていた。

フォックス「…動かないほうがいい。無残な死を味わいたくないのならつて…」

フォックス「…動かないほうがいい。無残な死を味わいたくないのならつて…」

ズルツ…

虫共「ギイイ！…？？？？…！」

フォックスの警告すら聞く耳持たないで虫共が振り返ると、所々の体に複数の線が走つて除所にずれていく。

フォックス「別にアンタらに言つてもわからないか。」

ドシャアアアア…

そう言つた直後に虫達の体が細かく分割され、勢いよく紫の血が噴き出し切り裂かれた虫の肉片が零れ落ちる。

シャアアアア…

血飛沫と肉片が飛び交う中、肉眼でも見える青白い幻影がフォックスに向けて走つて来た。

ファルコ「へつ…『改・フォックスイリュージョン』か。相変わらず手際いいってことで。」

シユウウ…

幻影でできたフォックスの残像が、本体の中に吸い込まれていくように入つていった。

本来「フォックスイリュージョン」は本体の後を付いていく欠点があり、超高速で走る本体と幻影は鋭い斬撃となつて単体の敵を攻撃

するような物。

だが今やった「フォックスイリュージョン」は、幻影自体が意思でも持っているかのように複数の敵の骨を砕き、肉を引き裂いて攻撃をしていた。

意思を持った幻影を保つためには、本体の強い精神力と集中力と脚速の強化が必要となるため、通常ならでは普通の身体だと本体そのものが破壊されてしまう可能性がある。

フォックス「手際いいって… ファルコ、お前もそうじやないか。」

ファルコ「テメエーは一瞬で殺つたじゃねーか。テメーのせいであと0・25秒の差が開いちまつたんだが。」

フォックス「いちいち戦闘経過時間に、小数点単位を付けなくともいいのに（汗）」

フォックスは呆れた表情で半分キレイているファルコを見て言った後、次なる敵へと走り出す。

ファルコ「（まだ弾数とマガジンを見る限り余裕があるな。なんだか弾薬がもつたないので、とりあえず俺の身体でも動かすとするか。）」

ガチンッ！

ファルコも装填動作をやつた後、フォックスの後ろへと付くようになっていく。

フォックス「（普通なら銃声ぐらい聞こえるんだが…）」

フォックスは先ほどいたファルコの足元を少しだけ見た時、頭部の無い虫共の死体が無残にも転がっていた。

銃口を見ても、銃声遮断装備さえも付けていなかった。

予感ではあるがフォックスは脳裏で思ったことは、先ほどの戦闘が始まった時に彼は虫共の攻撃を避けた直後、彼は真っ先にマルスの剣が虫の頭部に組み込む前よりも早く、虫共の頭部にめがけて撃つたのだ。

全員が地面へと付く音と虫共の体がぶつかる音で銃声をかき消し、さらに殺つた直後の虫共の断末魔で第一の銃声すらかき消し、その繰り返しを行つただけで殲滅させたのだと思った。

フォックス「（十八番の早撃ちね… もはや銃に関しては上級暗殺者並だなファルコ。）」

ブチュッ！ ブチャッ！ … ブチッ！ …

天井の電灯に引き裂かれた虫共の内臓の一部がぶつかり、纏わりついていた紫の液体が天井の壁を紫色へと汚していく。

ウルフ「ハンッ！？ この程度かよ、弱すぎるぜ。」

ドシャッ！ ップ！

右手に握んでいた虫の頭部を投げ捨てて左足で頭部を踏み潰した後、退屈そうな表情で潰れた虫の頭部に唾を掛ける。

虫共「ギ……ギギ。」

ウルフ「折角の新技をお前に試してみたかったんだが……」

鋭い爪が反射で光りそこに映るウルフの表情は、雑魚相手を詰まらない目で見下していたような表情を出していた。

ウルフ「弱すぎる奴には勿体無ねえ、素手だけで倒してやう。ただし……」

覚悟を決めたのかボロボロの両翼を持つ大きな蛾が、一直線にウルフへと目がけて突進する。

ウルフ「ハンデとして、『利き腕』は使わないでおくぜ? クソ雑魚共。」

グシャツ!

ウルフの足元に原形すら留めていない蛾の死体が、ピクピクと痙攣しつつ氣色悪い液体を零しながら転がっていた。

どうやら一瞬の内に利き腕ではない左手で蛾の頭部を掴んで、爪を頭部の中にある脳まで深く突き刺しながら、思いつきり足元に向かって叩きつけたようだ。

死にかけの蛾「ギ……ギイ……。」

体全体がグチャグチャにつぶれ内蔵類が床にブチまけながらでも、頭部が潰れた蛾は無駄に足搔こうと必至で動かそうとするが……

「ウルフ、『つまんねえ』ことすんなよ、さつさと逝つちまいなクソが！」

死にかけの蛾「ギッ……」

グチュツ……ジュジュジュジュジュ……

ウルフの左足で蛾の頭部を踏み潰し、完全に息の根を止める。

それでも飽き足らず左腰に納めていた銃を取り出して、蛾の体全体に向けて銃弾を撃ち抜き、跡形も無くなるまで撃ち続けた。

フォックス「おこおいおいおい（汗）……ウルフやりすぎだつて。」

ザンツ

フォックスは呆れた表情で、先ほどの意思ある幻影攻撃で虫共の肉を引き裂きながら、すでに死体と化した物体に好き勝手で壊すウルフに向けて言づ。

ウルフ「つるせえなフォックス。対外弱り切った獲物は逃してしまふと後面倒になる。労力を無駄なく行う場合はこのようにメッタメタにして容赦なく完全に動かなくなる（死ぬ）までぶつ殺すんだよ。それは俺らの世界とでも同じようなもんだろ？」

ザ「コツ！」

フォックス「まつ、アンタが言つてることは間違えじやないけど……さあ、これは酷いやり方だね。挑んだ敵……本当に可哀想。」

ザシユツ

ウルフ「ああん？ テメーも容赦なく殺つていいくせにそんなこと言えるのかよ。俺様の好敵手<sup>ライバル</sup>？」

グチャツ

フォックス「いやいやいやいや、俺は技功派なんでね。悪いけど倒し方はアンタと同じじゃなからや。」

ドスツ

ファルコ「（いやいやいや… 同じだと思つたぞ。今ここで俺が突っ込んでいたら「何かされそう」だし… 空氣読んでおこ（汗））」

ファルコは今だに群がる虫共を片腕だけでどんどん屠るウルフと、幻影で引き裂き手にする銃で敵の急所を撃ち抜くフォックスを呆れた表情で見て、次々と殺りながら論議をするウルフとフォックスに向けて心の中で空氣を読んでいた。

巨大百足「ギャツ！…」

マルス「（そんなに大したことではないとは言つても…）」

ザシユツ…ヒュン。

マルスは巨大な百足の首を切り落とし、刀身に付いた紫の液体を振り払つて、次なる標的へと定めながら腰を落とし斬りかかる。

マルス「（数が多くある…早めにやらないと僕らが逆に喰われる側になる。それよりも…）」

ザザザザ…

排気口等の隙間から溢れる様にどんどん虫共が次から次へと湧いてくる。斬り伏せていく度に数が増えているような感じもする。

マルスは的確に急所の部分へと刀身を食い込み、テンポよく斬り斃しながら地上にいる仲間達の現状を推測する。

マルス「（このような惨事が起きているのは僕らだけではないハズ…もしかしたら地上も…）」

隙を見て刀身に付いた液体を振り払い、巨大団子虫の腹に剣先を食い込んで一気に横へと伸ばすように斬り伏せる。

ゴボッ

所々へと零れ落ちる臓器と紫の液体…その紫の液体は、錆びた線路の上に広がりながら隅にある空氣講へと入っていく。

ザザザ…

その空氣講の中に、孵つたばかりの蛆のような幼虫が溢れていた。その幼虫の口に死した虫の血が入り込み、満腹感を覚えるまで跡形もなく吸い尽くす。

グチャリ…

それでも飽き足らず、たまたま近くにいた蛆のよくな幼虫の肉を噛みつき、新しい満腹感を味わう。

そしてその隣にいた蛆みたいな幼虫も、子供を喰った幼虫の肉を噛みつき…喰らう。それに釣られて幼虫も…その繰り返しで、もう流れてくる血を飽きて隣同士の幼虫の肉を喰らい尽くしていく。

グブツ

お互に肉を喰らいあつて数万体の幼虫の中の一匹が、最後の幼虫の肉を喰らつて飲み込み生き残つた。

残された一匹が唯一の強者となり残つた物の腹の中には、つい先ほど喰らいあつていた仲間の肉が体内を動き回り消化されている。

ギチ…

残されたモノの体が、時間を掛けて徐々に大きくなる。

体内に張る細胞が捕食した遺伝子を取り込み、所々分裂しながら増殖して異常に活性化する。

”生きるモノ全てヲ喰らひ尽くせ。”

脳に送られてくる情報はそれだけであり、先ほど喰らひ尽くした幼虫の血肉では満腹感を満たさず、今だに首から口に通して飢餓感が過る。

ボコッ

弱弱しかつた白い体が徐々に外部を覆い尽くすように硬くなり、腹の辺りから腕が生えて指先から爪を伸ばし、口から人間のような歯が生えてくる。

”喰ライ尽クセ”

そのモノはマルス達がいる「地上」へと顔を上げて、今だに成長し続ける身を伸ばし爪を壁に食い込みながら這い上がつていった。

*to be continues...*

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2650e/>

サヨナラ …永遠の約束…

2010年10月8日13時38分発行